

本気で語学を

モノにしたい

あなたへ

私は日本人です。



我是日本人。

I am Japanese.

ごがくゆうしん

国際舞台で輝くあなたに捧ぐ

はじめに

タイトルに“本気”とあるように、本書を手にしたあなたは本気で語学を習得したいと望んでいる方だと思う。本書は正にそんなあなたのために書きまとめたものである。筆者はあなたと同じように中学1年で英語をはじめ、32歳からは独学で中国語を学び始めた。中国語を始めて4年が経った頃には、私は母国語を含む3ヶ国語を不自由なく操ることができ、インターネットをはじめとした様々なメディアを通して海外文化を享受するようになっていた。自身の経験から外国語を日本にいながらにして習得することは、決して簡単なことではないが、正しいやり方を継続すればほぼ確実に一定レベルまではいけると確信している。本書では語学の効率的な学習方法やモチベーションの保ち方だけでなく、習得後に開かれる深くすばらしい世界についても触れてある。語学は目的

ではなく、世界を広げる手段であるべきだと思うからである。

本書に“**本気**”とつけたのには理由がある。語学の習得にはどうしても一定の時間がかかるため、継続することが不可欠なのだ。そもそも“本気”でないと継続ができない。

巷には“1ヶ月でマスターする～”や“聞くだけで～”のような語学教材が多いが、これらに興味を示す方は本書には向いていない。断言しよう。これらの簡単な方法で筆者の言う習得レベルに達することはありえない。本書が対象としている読者は、将来海外関連の仕事を志して勉学に励んでいる学生、または仕事上で外国語（英語、及び中国語）を必要とする方でプロとまでいかなくとも社内では3本指、できれば一番頼りにされる程度の外国語能力を身に付けたい方で、且つ、そのために一定の努力を惜しまない方である。

筆者は某国内メーカーに勤める一介のサラリーマンである。高校時代のアメリカへの交換留学をきっかけに異文化理解と外国語学習を志すようになり、大学で二度目の留学、卒業後は見地を広めるために通訳として世界一周の船に乗船した。その後、初めての中国出張で必要を感じ中国語を学び始めた結果、中国出張は中国語で殆ど全てをこなせるようになった。インターネットが発達した現在の世の中では、外国語が使いこなせると日本にいながらにして、海外の友達、メディア、音楽、何でも楽しめる。ネットには国境がないのだから。何も自慢するために書いているのではない。あなたもその気になれば必ずできることであり、できることで格段に広がる世界を楽しんで頂きたいのである。

本書の構成は第一章で『語学の目的』を中心に心構え、センス、資質についてまとめた。第二章に読者であるあなたが最も知りたいであろう『語

学習得のテクニック』について体系的に解説を試みた。筆者の経験からほぼ確実に言えることはあなたが学ぶ言語が英語であれ中国語であれ、結局のところ人間が言語を習得する正しい方法と順序は基本的には同じということである。そのため、本書の内容を確実に学べば、あなたの学んでいる言語が別の言語であっても正しい言語習得プロセスを知る、という意味において大いに役に立つことを保証する。

語学の方法論としては普遍性を意識して書いているが、通信技術の更なる向上により、将来本書よりもさらに効率的な学習が可能になることも十分にありえる。しかし、たとえ現時点でITの進歩が止まったとしても、外国語(英語・中国語)は日本での独習が十分に可能だと断言できる。

よくNo pain, no gain(苦勞なくして得るものなし)というが、これは事実である。しかし、GainするまでずっとPainではないことを見落としてはい

けない。Painは絶えれば時間とともにPleasure（快樂）に化けることを成功者の多くは知っている。本書のためにあなたが支払うお金のうちいくらかは筆者のポケットに入るが、その投資はあなたの実践次第で何百、何千倍にでもなるし、気持ち次第で紙くずになる可能性もある。当然、筆者があなたに望むのは前者である。

筆者も元来は怠け者の部類であるからわかるが、“わかっちゃいるけどめんどくさい”というあなたの心に潜む悪魔の囁きは恐らく他の皆の心の中にも存在する。この悪魔に支配されてしまうのか、或いはあなたが自らの手で悪魔を退治できるかが勝負の分かれ目になると思ってほぼ間違いない。筆者がモチベーションの保ち方に多くのページを割いたのは、語学を習得するに当たってこれがいかに重要であるかを身にしみて知っているからである。語学の習得は、何もボクシングの世界チャンピオンになるとか、オリンピッ

クで金メダル取るとかいったこととは違う。これらは人と競争して勝者と敗者が決まってしまうので、努力すれば必ずできるとは限らない。語学は自分との戦いであるから、自分に勝てれば誰でも勝者になれるのだ。ただ、語学は簡単なことの積み重ねであるため、習得にかなりの時間がかかるのである。筆者の中国語習得の経験ではゼロからはじめて3年で自由会話のマスター、5年で高度なコミュニケーション技術の習得、といったところである。その途中で「俺はバカのひとつ覚えみたいに何やってるんだろう」、「そもそも自分のレベルは上がっているのか」などネガティブな感情になることは少なからずあった。語学は競争相手のいないマラソンのようなもので、目標地点を設定して自分の現在地を確認しながら、途中の長い道のりを如何にしてモチベーションを保っていくか、ということが習得のカギになる。

あなたを鼓舞するために最後に言っておきたい。この本を手にする方が100人いるとして、この内容を着実に実践して本当の意味で語学を“習得”する人は、多くても10人くらいであると思う。それほどに元来人は怠け者だからである。たとえそうだとしても、筆者はこの本が残りの90人にとっても確実に有意義になることを約束する。今からその扉をあけるあなたが、最初の10人に入ることをお願いする。

はじめに.....	1
第1章 語学を志す目的.....	9
1-1 語学のきっかけ.....	9
1-2 センスと資質.....	20
1-3 語学の目的.....	31
第2章 語学のテクニック.....	34
2-1 語学の真髄 インプット・アウトプットの法則.....	35
2-2 言葉を学ぶ順序（先天セットと後天セット）.....	39
2-3 日本語にない概念（Cゾーン）を理解する.....	50
2-4 文法という大事でいい加減なもの.....	57
2-5 先天セットの訓練方法.....	62
2-6 後天セットの勉強法（リーディング＋ライティング）.....	106
2-7 総合力の鍛え方.....	143
2-8 教材の選び方.....	150
2-9 モチベーションの保ち方.....	165
2-9-1 目標設定と見える化.....	167
2-9-2 怠け者のためのタイムマネジメント.....	176
2-10 仮想留学という考え.....	189
2-11 仮想留学を実現するためのツール.....	193
2-12 語学の実践場所.....	206
終わりに.....	217
あとがき.....	222

第1章 語学を志す目的

1-1 語学のきっかけ

あなたが学習する言語が英語であれ、中国語であれ、あなたは何故、その言語を習得したいと思ったのだろうか。

- 海外旅行を現地の言葉で楽しみたいら。
- ジョニー・デップの言葉をそのまま聞き取りたいから。
- 得意ではないが、仕事で必要に迫らて。

ミーハーな動機の人から高い志を持つ人まで、様々いると思う。結論から言えば、はじめるきっかけは何でもいいと思う。おそらくJリーグで活躍する選手にサッカーを始めたきっかけを聞いたって『女にモテたかった』とか『お父さんに連れられ

て』というような、些細なきっかけの人ばかりで、最初から『マンチェスター・ユナイテッドに入るためにはじめた』なんて人はほとんどいないだろう。

正直に言うと、私が32歳の時、中国語を勉強しはじめたのも、些細なことがきっかけだった。

2007年当時、会社で初めて中国に出張した際、出発前は得意な英語で大体は何でも通じるものだとか力をくくっていた。しかし、蓋を開けば、英語をまともにできたのは、現地の取引先会社の社長さんだけで、他の社員はできても片言レベルでしか通じなかったのである。何とか関係を良好に維持したいという思いで酒の席でも“ニーハオ”、“シェシェ”と誰でも聴いたことのあるような中国語を言っては愛想笑いをして、何とかすごした。しかし、コミュニケーションがまともに取れないもどかしさに私の心は終止イライラしていた。『彼らが英語をできるのを待つより、俺が中国語を覚えてや

ろう』と思い立ったのは帰りの飛行機の中だった。

当初から私は語学には普通に自信はあった。何故なら、中1から始めた英語の成績は常によかったし、その後、留学やボランティアの通訳などを経験し、社会人として最初に就職した23歳ですでに英検1級、TOEICも900点を越えていたからだ。但し、中国語と言う言語が英語と何の関係もないことぐらいは感覚的に分かっていたし、この聞けば聞くほど難解な言語を不自由なく操るようになれるとは到底思えなかった。語学を志すあなたなら分かると思うが、**言語の習得は母国語や既に習得済の言語からの言語的近似性によって習得難易度が決まる。**例えば日本語と英語は太平洋を挟むように全く違うルーツを持つ言語同士なので、日本人が英語に苦しむのは実は当たり前なのだ。逆に英語を習得してしまえば、ルーツが同じヨーロッパ言語、つまりオランダ語やス

ウェーデン語などは、英語をベースにして学べば習得はさほど難しくないはずだ。因みに日本人にとって一番近い外国語は韓国語だと言われている。残念ながら中国語と日本語は漢字をはじめとする文字文化こそ大きく日本語が恩恵を受けているが、運用言語としては全く関係がない。だから、日本人が中国語を学ぶということは既に英語を習得しているとしても、漢字の意味がほとんど分かるということ意外は、新たに外国語を学ぶ、ということとさほど変わらないのである。

さて、帰国の飛行機内で思い立った私は習得段階を大きく次の3段階に分けて考えた。

1. 発音のしかたと基本単語
2. 日常会話
3. ビジネス会話を含めた高度なコミュニケーション

先ず第1段階、まあできて1-2年の時間をかけて2段階くらいまでいけるかなあ、ぐらいに思っていた。結局、最終的には第3段階まで行って現在に至っている。

中国語と英語にはルーツ的な共通性はないのであるが、それでも私は中国語を勉強する過程で、英語の習得過程よりもスピードが明らかに速いように感じた。これは、なんだかんだいっても英語に比べれば中国語の方が日本語に近いという理由もあるが、もっとも大きな理由は言語を習得するということに私がいくつかの共通するコツのようなものを見出していたからではないかと思う。実際、学習開始から4年でほとんど不自由なくできるようになったということは、英語で言えば中学1年から初めて高校1年生の終わりにはマスターしているということと同じだ。言語は若いうち程、吸収力があると考えれば、英語はもっと早くできていても全く不思議ではない。

このように書くと、あたかも私が軽々と、それこそドイツの語学の天才シュリーマンのようにスムーズに新しい言語を習得したのかと思われるかもしれない。しかし、それは絶対に違う。やはり、私も習得過程で、しんどくて、あほらしくて、やめそうになったことは何度もあったのだ。その中で自分なりの工夫をしてモチベーションを保ち、勉強を継続させる仕組みを構築したからこそ、今のレベルまで到達できたのだと思う。少なくとも留学をせずに外国語を習得した人で何となく続けてやっていた気づいたらできていた、という人は皆無だと思う。かのシュリーマンにしても相当高い“センス”があったのは間違いないと思うが、“天才”ではなかったはずだ。彼の著書『古代への情熱』からは幼少から抱いていた古代遺跡を発掘するという並々ならぬ強烈な熱意と目的意識がエンジンとなって尋常でないほどの勉強を継続的に

続けた様子が生々しく伺える。正に努力に勝る天才はいないということになる。

“思い”は継続するとともに“信念”に変わる
私もささいなきっかけで中国語学習を始めたのであるが、始めたときのテンションでずっと続けたわけでは決してない。何とか勉強を継続させようとする過程で、最初の軽い“思い”は段々と強まっていき、それは“意地”になって、最後には“信念”に変わった。半分は継続するうちに自然に思いが強まったとも言えるが、もう半分は“起きた出来事”を私が意識的にエネルギーに変えたのである。よく“コンプレックスをバネに”、という話を聞くことがあるが、あれもまた、思いをエネルギーに変える一種のテクニックだと思う。実は私は中国語を始めてもうすぐ2年という頃、自身の犯した過ちがきっかけで、それまで所属していた海外営業部を離れ、マーケティング部という新しい部署に

回ることになったのである。おそらく周りから見たらいわゆる“左遷”だと思われたに違いない。

ショックを受けなかったと言うと嘘になるが、私は全く腐りはしなかった。

逆におそらく自分を外す決定を下したであろう上司の上司に“今に見ていろよ”と心に発破をかけたのだった。当時、中国の市場がさらに伸びるであろうことは誰でも容易に予想ができたと思う。当然、中国語ができれば有利だということも考えれば分かることだ。しかし、本気で独学でこの複雑な言語を習得しようと腹を決めるのは容易なことではない。すでに学習から2年近くが経過していた私は、この時に、絶対にやめないこと、絶対にマスターしてやることを本気で心に誓ったのだ。

20代の頃、私も自己啓発やいわゆる成功本を多く読んだ。これらの本に書かれていることは共通項が多く、大体が正しかったと思う。つまりは、強く思えること、強く信じられることは、実現可能

という単純なことである。但し、これは逆に言うと強く信じられないことは、大体不可能なのだということでもある。例えば、あなたは訓練を積みば100mを9.8秒で走れるようになれると本気で信じられるだろうか。多分、無理だと思う。

これはあなたが陸上競技をやっていないから(たとえばやっていたとしても)、臨場感をもってそれをイメージできないからである。そこに全くのリアリティが感じられなければ、先ず無理なのである。では、あなたがバリバリの陸上選手で100m 9.9秒の自己記録を持っていたとしたらどうか。おそらく調子がよい時期に自分を強くそう仕向ければイメージできる可能性が高い。そして、イメージできれば、それに向けて努力を重ね、ついには達成するのである。

私の中国語の場合、学習を始めた時点ではペラペラしゃべっているイメージは持とうとしてもてなかった。現実との開きがあまりにも大きすぎた

からだろう。約2年が経過して部署を移動した時もまだできてなかったと思う。ただ、この一件で猛烈に意識をした結果、3年が経つころには日常会話は7-8割レベルでできるようになっていた。

そして、この3年経過くらいの時点から、初めてイメージの中で何の不自由もなく中国語を操る自分のイメージが描けるようになっていた。それから更に1年たったころに、始めてあの時イメージした自分と実際の私を重ね合わせることができた。

あなたが外国語学習を始めたきっかけが何であってかまわない。それを継続する過程でどうにかして先の姿を鮮明にイメージできるくらいの自信をつけてほしい。それができた時点で線路の敷設は完了、あとは線路に沿って停まらず電車を走らせるだけである。

1-2 センスと資質

よく“あの人は語学センスがある”という言い方を
するが、語学にセンスの善し悪しはあるのだろうか。
筆者の個人的な観点で言うと、やはり多少は
あると言わざるを得ない。但し、これは学ぶ対象
がサッカーや野球などのスポーツであれ、ギ
ター、ピアノなどの音楽であれ、ほぼ何をやらせ
たとしても、そこにはもともとの“スジ”が関係してく
るというのと同じ意味においてである。幼少期を
海外で過ごした帰国子女のように環境に恵まれ
てほぼ完全なバイリンガルになる人もいれば、中
学からの学校の授業で勉強を開始して、何不自由
なく外国語を操れるようになる人もいる。かとい
えば、大人になってから海外で5年も10年も生活
しているが、せいぜい日常会話程度の語学力に
しか到達しない人も大勢いるのが現実だ。統計
的に言えば、やはり語学は始めるのが若い程、

習得できる可能性は高いというのは事実であろう。ただ、私が中国語の学習を始めたのは32才の時であり、決して語学を始めるには若いとは言えない年齢であった。すでに結婚して二人の子供がおり、子育て参加や家事の分担のプレッシャーの中、決して語学学習に恵まれた環境ではなかったと思う。でも学習開始から4, 5年経過した頃には、私は中国に留学中の日本人学生や仕事で駐在しているほとんどどの日本人サラリーマンよりも流暢に中国語を操れるようになっていた。つまり、効率のよいやり方で愚直に継続して取り組めば、少なくとも海外文化を楽しむ一定のレベルまでは行けるという事実である。では、センスはできればあったほうがよいとして、それ以外に外国語を習得するにあたって必要な資質について筆者の見解を述べたい。

1. 情熱(パッション)と好奇心

外国語を習得する上で必要ないくつかの資質の中で、筆者が真っ先に挙げるのは情熱と好奇心である。これは言い換えれば“好きこそものの上手なれ”と近い意味になる。アップル社共同創業者であるSteve Jobs氏はコンピュータが好きで好きで溜まらなかったそうである。だからこそ、この世界ののめりこみ、その中に新しい夢を描き、それを次々と実現させていったのである。彼の育ての親は中卒、高卒のワーキングクラスでありながらJobsのために一生懸命大学進学のコストを捻出した。おかげで彼は希望の大学へ進学を果たしたものの、わずか半年でその大学を辞めてしまう。理由は自身の興味がわからないことに時間を費やすのがもったいないと思ったからだそうだ。その時点で一般人の感覚ではないのだが、逆に自身の興味のあるものに対しての集中力も同様に半端ではなかったからこそ、同業界に革命を起こせたのだと思う。彼はその後、退学した身であ

りながら興味がそそられたという理由だけで、Caligraphy(キャリグラフィ)のクラスにお忍び参加(sneak in)し、そこで得たアイディアは、後に開発した世界初のtypography (タイポグラフィ)搭載のパーソナルコンピュータMacintosh(マッキントッシュ)として世に送り出されることとなる。全ては彼の強烈な情熱と好奇心がもとになっていると、いってよいと思う。

私のような凡人をJobs氏になぞらえる気は毛頭ないが、私も語学に対しては一定の情熱と好奇心を有していると思う。私は読者の多くの皆様と同様に中学一年から本格的に英語の勉強を開始したが、学校でならった“My name is Yushin”, “Nice to meet you”が、初めて話す外国人(アメリカ人)に通じた時の感動が今でも心に強く残っている。通じるから、もっと知りたい、もっと知りたいからもっと勉強したい、というように学びのサイクルが加速していったのを昨日のことのよう

い出す。今となっては通じることが当たり前となり、あの時のような感動を味わうことは少なくなったが、あの感動が今日までの自分を形作っている重要な要素のひとつであることは間違いない。後に中国語を学ぶようになって、初めて本格的に中国人と対峙して、自分の中国語が通じた際も、やはり、まるでタイムスリップしたかのように同じ感動を味わうことができた。

熱心な語学の学習者であるあなたであれば分かると思うが、語学は追求すれば“語学”単体で終わることは決してない。追求すればするほど、それが当地の文化と密接に繋がっていることが分かり、その文化圏の歴史を理解しなければ、そこに生活する人の本当の実態を知ることはできないという結論に達するはずである。この探求は人が一生をかけて学べるほど深く重要かつ面白いテーマであると気づくはずだ。そして、その探求が真の意味での国際理解へとつながり、ひいては

自国日本の国際化へと繋がっていくのだ。全てはあなたの情熱と好奇心が発端となるのだと思う。

2. 行動力

言語は人が作ったインタangibleで流動的なものである。あなたがもし、数学を勉強しているのであれば、おそらく、机上の勉強を一所懸命やれば一定レベルまで到達できるように思う。だが、外国語を習得しようと決意した場合、特に自国にしながらにしてネイティブに認められるほどの語学力を養いたいと思う場合、“行動力”があることは重要な要素である。行動力とは目的を達成するための手段をあらゆる角度から考案し、それを実行する力のことである。恐縮であるが自身の経験を引き合いに出して、解説したい。

大学でアメリカへの留学を終えて帰国した私は、すでに高レベルの英語力を身に付けていたにも関わらず、全くもって自身の口語コミュニケーション

ン能力に満足していなかった。大学卒業までまだ半年以上あるなかで、どうにかしてライバルを寄せ付けないくらいの満足いくレベルの英語力を身に付けたいと思っていた。時は1998年、日本でもインターネットが徐々に普及し始めた時代である。当時、名古屋に在住していた私は、スカパーフェクトTVで米国のFOX NEWSやDISCOVERY CHANNELを四六時中付けっぱなしで見る傍ら、どうにかしてスピーキング能力をぶっちぎりに高められないかと考えていた。そこで思いついたのがカリフォルニアのピザ宅配だった。当時、インターネットを通じていろいろな情報が手に入る中で、カリフォルニアのピザ屋に電話をかけてピザをオーダーすることを思いついたのだ。先ず、インターネット上のホームページから電話番号を書き記す。そして、どのサイズのピザに何のトッピングを乗せるかをある程度決めた上で国際電話をかけるのだ。“Hi, XXX pizza, may I

help you? (いらっしやいませxxxピザです)” おそらくバイトで雇われているであろうカリフォルニアの兄ちゃんが電話にでる。“Yes, I would like to order a pizza for delivery (ピザのデリバリーお願いします)”という、兄ちゃんはピザの種類やトッピングを聞いていく。最初は早口に慣れずに色々聞き返すのだが、それも段段に慣れてくる。如何しても分からなければ“Sorry (ごめんなさい)”と言って切ってしまえばよい。試行錯誤の末、ピザの生地やトッピングを全て伝えて、兄ちゃんが配達住所を聞いてくるときである。すかさず “Can you Fedex to Japan? (日本にFedexしてくれない?)” と言えれば成功である。相手はカリフォルニアのバイトの兄ちゃんである。ほとんどの場合、ジョークの許容範囲内として、笑って許してくれた。

もちろん、ここで皆さんにいたずら電話を奨励しているのでは決してない。語学に本気で取り組も

うと思った場合、好奇心と創造力(クリエイティビティ)を存分に働かせれば、ネイティブスピーカーに接点を持つための行動力が生まれることを訴えたいのだ。カリフォルニアのピザ屋はほんの一例に過ぎないが、目的を明確にして本気で手段を考えればいくらでも方法は見つかるはずである。

3. 継続できること

語学を習得する要素として最後に“継続”をもってきたが、最初的情熱と好奇心に劣らず重要な要素のひとつであると認識している。語学の習得は決して短距離走ではなくマラソンのような長距離走である。私は外国語を習得するということは簡単なことではないと思うが、難しいことでは決してないとも思っている。“簡単なことの延々たる反復と継続”という表現が一番ぴったりくる。もし、語学が難しいとしたら、それは大して面白くもない比

較的簡単なことを、脳に刻み込まれるまで延々と繰り返すためのモチベーションを継続させることである。語学は一週間とか一ヶ月とかの期間集中して取り組めば習得できるものではない。こつこつと地味な作業を一ヶ月、3ヶ月、半年、一年とやるうちに段段と実力が伸びていくものである。成果がすぐに見えないからといって一ヶ月とかでやめてしまうひとは語学の習得には向かないと言ってよいだろう。後述するが、継続するためのテクニックも必要である。要は昨日より今日、今日より明日の方が上達していることを実感する仕組みをつくることが大事である。

1-3 語学の目的

語学を始めたきっかけは人それぞれあるものの、その究極の目的とは何だろうか。私はあなたが外国語教室の先生にでもならない限り、あなたにとって外国語そのものが目的になることはないと思う。よく言われるように、外国語は英語も中国語も基本的には日本語と同じコミュニケーションツールのひとつに過ぎないのである。それは、意思疎通の“手段”であって“目的”ではないのだ。例えば、あなたが必死で勉強を続け、ようやく英語をマスターしたとする。あなたはアメリカ人の友人と電話で流暢に冗談話に花を咲かせ、ゲラゲラと笑っている。果たしてあなたは気分がいいだろうか？私の答えは逆について、『YES, OF COURSE, 気持ちいい』である。それは長年苦労を重ねた結果、やっと海の向こうにいる人間とし

かも周りの人がほとんど分からない言語で)コミュニケーションがとれるようになったのである。そんなもん、快感に決まっている。しかし、この中身の薄いバカ話をするだけでは、これから始まる世界の『入り口に立った』とは言えても、『醍醐味を味わった』とは到底言えないのである。外国語を習得して言葉が通じた時の快感は私もよく分かる。私も一時的に半分それが目的になってしまうことすらあった。しかし、外国語を日常的に使用するにつれ、その快感は段々薄れていき、最後には当たり前になっていく。これはあなたが意思伝達の手段としての外国語をマスターした証拠である。

私は外国語をマスターする本当の目的はそこからやっとはじまるのだと思っている。外国語を習得したということは、当地の文化や歴史を含めたありとあらゆる情報にアクセスする手段を確立したということなのである。外国語を通して手にす

ることができる情報の中には、日本語や日本の価値観では測れないものが多く存在する。この媒体を通して入ってくる情報を自身の文化フィルターに通してろ過してみるとよい。ろ過されて出てきたものが異文化圏からもたらされる本当のインテリジェンスなのである。このインテリジェンスはあなたの視野を広げ、同時にあなた自身の人間の幅も広げてくれる。あなたのレベルが高まれば、結果的にあなたの国のレベルも高まるのである。私は語学の習得の究極の目的はここにあるのだと思っている。

ご感想を[こちら](#)へお願いします！



グウィッくして感想ちょ！

第2章 語学のテクニック

本章よりいよいよ語学習得のテクニックについて解説したい。本章での解説は英語や中国語に限らず、全ての外国語学習に適用できる普遍性を意識して書いてある。私が見る限り日本での学習者の多くは語学に対してのアプローチを間違えて認識しているか、間違っているのをうすうす気づきながらも延々と同じ方法で勉強を続けている様である。そのため、本章の前半では語学というものの理論を中心にまとめ、読者に改めて正しいアプローチを再確認して頂こうと試みた。後半では語学習得で大事だと述べたモチベーションの保ち方について、そして私自身がどのようにして語学を道具として活用しながら学びを続けているかについて、いわば語学の実践編としてまとめた。一度で理解しなくても、何度も読み返して納得いただきたい。

2-1 語学の真髄 インプット・アウトプットの法則

長年、語学というものに携わるなかで、最も大事なことは何かと考えてみた。文法？単語力？リスニング力？どれも大切であることは間違いないが、私は語学の真髄は何かと聞かれた場合『インプット・アウトプットの法則』ということにしている。これは、良質のインプット(リスニング＋リーディング)があつて初めて良質のアウトプット(スピーキング＋ライティング)が可能になるという考えである。あなたが今、日本語をしゃべっている(アウトプット)のは生まれて母親をはじめ周りの人の日本語を聞き続けた(インプットし続けた)からである。あなたのしゃべる日本語は、間違いなくあなたがこれまで聞いた日本語が元になっている。その証拠に九州で生まれ育てば九州弁をしゃべるし、大阪で育てば大体関西弁をしゃべるようになる。標準語をしゃべる父親と母親に育て

られた赤ん坊の第一声が『おかん、ミルクほしいねん』ということは普通ありえないのである。

これを外国語学習にあてはめるとどうなるだろうか。外国語で言うインプットとはリスニングとリーディングであり、アウトプットとはスピーキングとライティングになる。つまり、上手に話したり書いたりすることができるようになるためには、良質の外国語を聞き取り、良質の外国語を読むことが必須条件になる。コンピュータの世界でGIGO (ガイゴー)という言葉があるのを知っているだろうか。これは“Garbage in, Garbage out (ゴミを入れたらゴミが出る)”の略でコンピュータと言えど、入力するものがダメだったらダメな出力しか期待できないという意味だそう。言葉を覚えるときの人間の脳もコンピュータと同じで、全てinputから始まり、それがoutputに反映されるのである。私はこれを勝手に『インプット・アウトプットの法則』と名づけている。本書で何度も出てくる語学の基

本中の基本なので、覚えて頂きたい。この法則を聞いて今の時点で“ピン”とこななくてもよいと思う。しかし、あなたの学習する言語が何語であるかに関わらず、継続して学習して習得レベルに達したときに、振り返ると結局この原則に行き着くと思う。因みにこの『インプット・アウトプットの法則』は言葉だけに留まらず、音楽などの芸術にも当てはめることができる。標準語ばかりを聞いて育つ赤ん坊が関西弁を話さないのと同様に、クラシック音楽ばかりを聞いて育った音楽家がいきなりロックミュージックを作曲することもないのである。そして、言語も音楽もインプットの量が臨界点に達した後に溢れる様にしてアウトプットが始まるのである。

2-2 言葉を学ぶ順序（先天セットと後天セット）

あなたは言語を覚えるには順序があるということを意識しているだろうか？ご存知の通りどんな言語もリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4要素で構成されている。インプット・アウトプットの法則を理解したあなたなら分か

と思うが、これらの4つの構成要素は順不同で学んでよいわけではない。ちゃんと学ぶ順序が決まっているのである。その順序は基本的には赤ん坊を参考にしてよいと思う。赤ん坊は母親のしゃべる言葉を聞いて脳に蓄積していく(リスニング)。1年、2年と母親の言葉が蓄積されて、初めて言葉らしいものをしゃべりだす(スピーキング)。その後、3歳～5歳くらいで教育を受けられる恵まれた環境にある人はリーディング、ライティング(読み、書き)を覚えはじめる。通常5歳くらいになるまでには日常的に話される内容の言葉を聴いて理解し、口頭で意思を表現する能力がついている。このリスニングとスピーキングの能力は言語の基本であり、リーディングやライティングは後天的な学習によって初めて可能になる応用レベルの能力である。本章で語学のテクニックを説明するにあたり便宜的にリスニングとスピーキングを『先天セット』、リーディングとライティングを『後

天セット』と称して分けて説明を試みたい。アメリカでも中国でも母国語を話せないと言う人はほとんど皆無に近いが、読み書きができない人は未だ多いように、これら二つの能力は本来分けて考えるべきなのだ。リーディング、ライティングという能力は高等動物でも人間にしか与えられてない能力であり、これらはリスニングとスピーキングの能力が一定レベルまで到達して初めて学ぶべき高等技術なのである。つまり、赤ん坊が言語を学ぶ順序は

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. リスニング(input) | |
| 2. スピーキング(output) | 先天セット (人間にもともと備えられた能力) |
| | |
| 3. リーディング(input) | |
| 4. ライティング(output) | 後天セット (学習して覚える能力) |

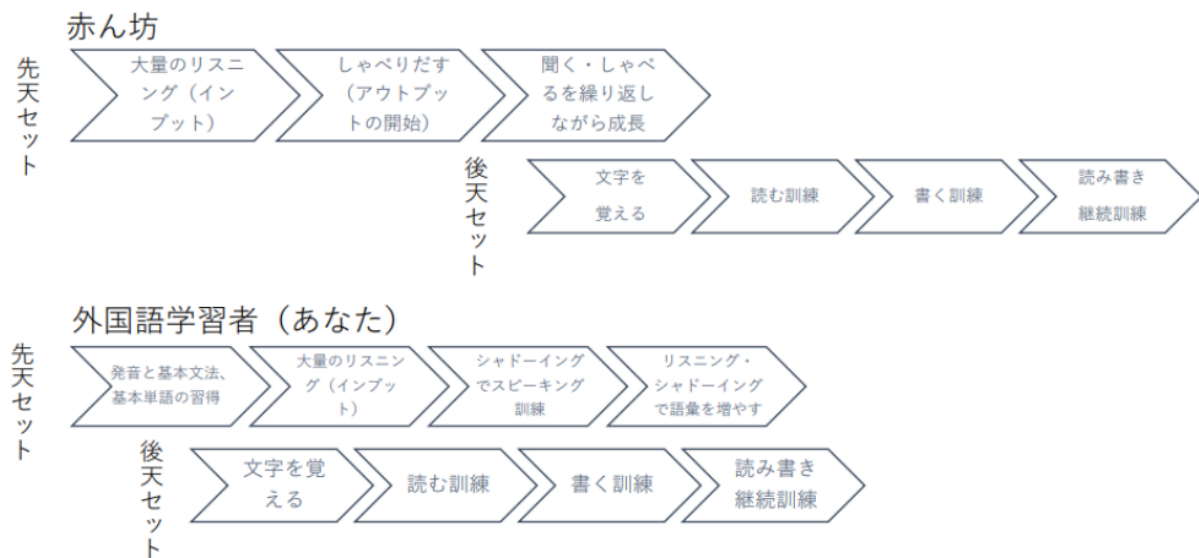
ということになる。あなたが外国語を学ぶときも、基本的には同じ順序で学ぶべきなのである。言うまでもなく日本の学校での外国語教育は後天セット(リーディング＋ライティング)に重きが置かれすぎており、先天セット(リスニング＋スピーキ

ング)に十分なウェイトが置かれてない。これは基本を飛ばして応用をやるようなものであり、結果、中学、高校と実に6年の時間をかけて勉強しても日常会話も満足にできないという深刻な状況が当たり前のように放置されている。あなたの目的が中間テストや期末テストをパスすることであれば、何も言うつもりはないが、将来的に外国語を実用言語として使おうと考えているのであれば、学校の教育課程とは別に足りない部分を補う学習を自分で行うことをお勧めする。きちんとやれば、高校卒業時には少なくとも通常の日常会話などは全く問題なく話せるようになっているはずである。

さて、赤ん坊の言語の習得順序を見てきたが、残念ながらあなたは赤ん坊ではない。従って赤ん坊と全く同じように外国語を学ぶことは難しい。では、赤ん坊とあなたでは何が違うのだろうか。違

いはたったの一つで、赤ん坊の頭は真っ白なの
に対しあなたの頭には既に母国語がインストー
ルされているということである。これはパソコンの
OSに例えると分かりやすい。赤ん坊はOSの
入っていないパソコンだから第一言語をそのまま
インストールすることが可能なのに対して、あな
たの場合は母国語(日本語)というOSが既にイン
ストールされているため、別の言語をいれようと
する時、既存のOSが邪魔をするのである。か
といって、既存OSを通さずに外国語を理解しようと
しても、それは非常に難しい。外国語学習者の場
合は、最低限の基本文法や単語を既存OS(母
国語)を通して学んだ後、大量のインプットにより
徐々に独立した外国語OSにしていくことが理想
的なのである。これは言うのは簡単であるが、実
際には現在の外国語教育のやり方を根本な部分
から変えることになるので容易なことではない。
下に、赤ん坊の言語習得過程とあなたの外国語

習得過程(理想)を並列で流れのグラフに表したのでよくご理解頂きたい。



あなたは先ず、外国語の発音を耳から覚え、実際に発音できるようになるまで練習することから始めるべきである。良質のインプットが良質のアウトプットを生むのであるから、耳から覚える際はネイティブスピーカーのオーディオメディアから耳に入れることが望ましい。十分に発音ができるようになった時点で、基本の単語と文法を覚える。文法は言語の構造を体系的に説明したものであるから、どうしても母国語(日本語)でないと理解

しにくい。但し、次項で詳しく説明するが、この文法はある程度いい加減に7-8割程度覚えるくらいの感覚でよい。何故なら、語学の最終段階では文法というものを考えずに自然と自分の意思を外国語で表現できることが理想であるからだ。基本文法を覚えたら、あとは正しい音声教材を使って大量にリスニングすると同時に、同じように口から出せるようにスピーキングの練習も大量に行うとよい(最も効果的な『シャドーイング』という方法については後に詳しく説明する)。この、正しい発音の仕方と大量リスニング＋大量スピーキングの部分が日本の学校教育ではすっぱり抜けていて、多くの先生方も実はできていないのが現状である。大量リスニング＋大量スピーキングは、一定レベルまでいけばやめてよいわけではない。習得するまで、そして習得してからもずっと続けるべきである。あなたも母国語である日本語を聞き続けているし、しゃべり続けているだろう。そ

れと同じである。当然、最初はスピードについていけなかったり、分からない単語が多すぎたりして“苦”に感じることもあると思う。しかし、続けていけば確実にあなたの脳内に外国語回路が構築されていき、習得段階ではそのまま理解できるようになり、聞くこと自体が楽しくなっているはずである。

これと平行して学校教育でおなじみの後天セットを覚えていけばいい。先述したとおり、先天セットが基礎で後天セットは応用である。これらの能力も勉強すればできるというものではなく、結局のところ最後にモノをいうのは量である。日本語でも多く本を読む人とそうでない人を比べれば、ほぼ確実に前者のほうがリーディング及びライティング能力が高いはずである。外国語のリーディングとライティングの習得も大量に良質のものを読み、それを書き出す訓練をすることに尽きる。リスニングもリーディングも大量に行ってそれ

が脳内で臨界点に達して初めてスピーキングやライティングに正しく反映されていくのである。こう言うと、『聞いて分からないものは何回聞いても分からない』し、『読んで意味が分からないものは何回読んでも分からない』という人がいると思う。その通りである。意味が分からないまま闇雲に聞いても読んでも実は効果は上がらず、かえって苦痛である。『聞くだけで・・・』などの教材が効果をもたらすには条件があるのである。3回聞いて分からない単語が4回目に分かるということは殆どないと考えてよいと思う。どうすればよいかについては2-5でじっくり見ていくことにしよう。

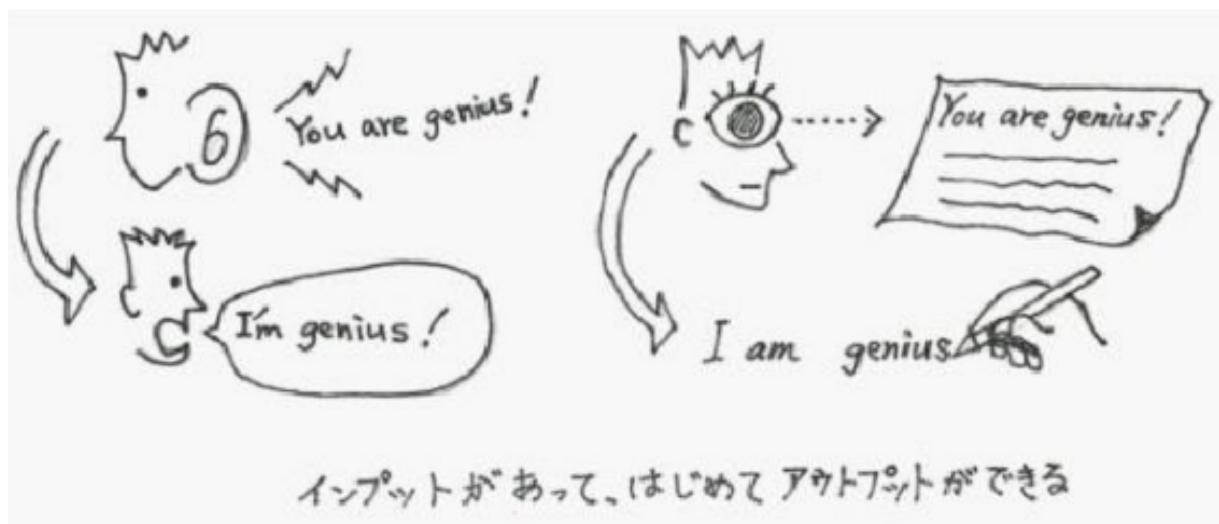
ここまで説明した『インプット・アウトプットの法則』と言葉を学ぶ順序は今後学習を進めていく上で非常に大事な基本概念である。それは学習しているのが英語でも中国語でもアラビア語でも正しいアプローチは全く同じだと考えてよい。理解を

深めて頂くために、おさらいとして下記をもう一度だけ声に出して読んでほしい。

- 言語の習得は音声のリスニングから始まり、そのリスニングがスピーキングに反映される。
- 読み書きの能力は応用技術であり、基本である「聞く・話す」の後に学ぶものである。
- あなたはたくさん聞いて初めてしゃべれるようになる。
- あなたはたくさん読んで初めて書けるようになる。

あなたが中学高校で6年間勉強しても“しゃべれるようにならない”のは至極当たり前である。必死で受験勉強をしたあなたは読んでばかりいたのではないか？6年間で合計何時間の英語(中国語)

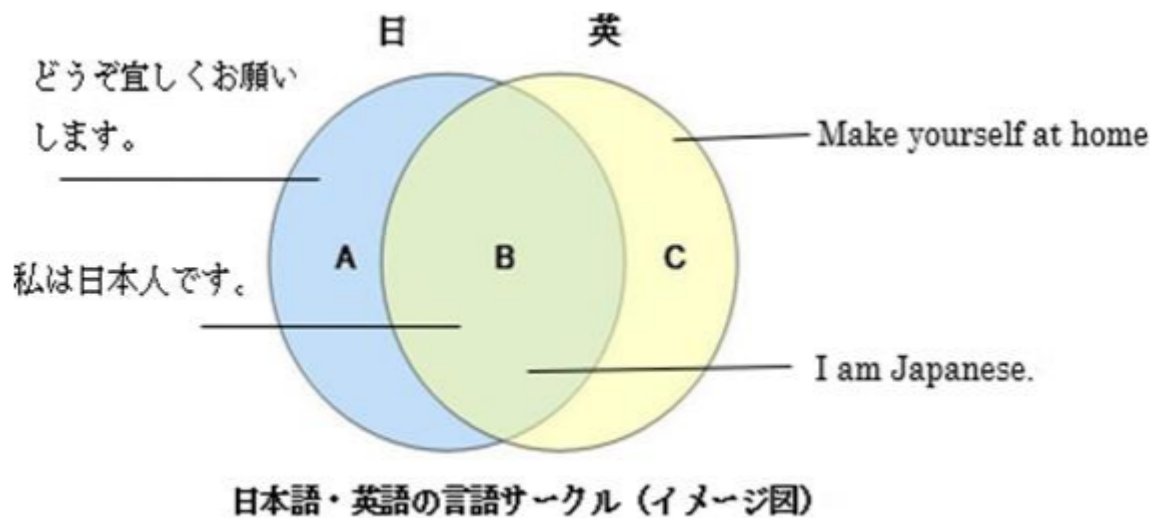
を聞いただろうか？それが分かれば答えは自明である。この大きな矛盾に気づいたあなたは絶対に今からでも遅くない。本書をしっかりと読んで学習法を改善してほしい。本書で紹介する習得方法はあくまで『外国語そのものを文化ごと脳にインストールする』とイメージして頂きたい。難しく聞こえるかも知れないが、継続してやれば必ずできることである。ここでは、語学学習の正しい順序と『大量インプットが全ての土台になる』ことのみ、最低限理解した上で、次の章にすすんでほしい。



2-3 日本語にない概念(Cゾーン)を理解 する

私は語学に携わる中で外国人や帰国子女の友人、又は日本で英語を勉強する学習者の皆様と接する機会が多くある。帰国子女とは通常、親の仕事の関係などで幼少期を外国で過ごし、自然に2つの言語を習得した人たちのことを言う。一方で英語圏に留学するわけでもなく、全て日本で勉強し英語をマスターされた方も多くいらっしゃる。私は彼らのしゃべる英語を聞き比べていて気づくことがある。例えば発音に関しては、幼少期

を当地で過ごした帰国子女の方が国内学習者に比べて大体はきれいな発音でしゃべることができる。国内学習者の練習不足もあるかもしれないが、ある程度はしょうがないだろう。しかし、多くの場合、この発音やイントネーション以外にも確かに違うところがあるのである。それは一言で言うと“発想”や“表現”ということになる。例えば、あなたが日本で英語を長年学習して、日本語で言えることはほぼ全て英語で言えるようになったとする。この状態は、自分の考えを英語で表現することができることになったということではあるが、“真のバイリンガル”にはなってない場合が多い。何故なら、この時あなたは常に日本語で発想して、それを英語で表現しているだけだからである。下の日英の言語サークル(イメージ図)をご覧ください。これは日本語と英語の発想や表現の領域をイメージ図で表したものである。



例えば、『私は日本人です』は“I am Japanese”と訳することができ、ほぼ同じ意味と言えるだろう。ほぼ同じ意味になるのはこの文に文化的な要素がほぼ含まれていないからである。イメージ図でいうところのBに属する部分だ。では次の場合はどうだろう。

『私は山田と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。』

この文は厳密に言えば100%同じ意味の英語にするのは不可能である。なぜなら『申します』とは謙譲表現であり、英語にこれに相当する表現がないからだ。また『宜しく願います』が意味するところも、一字一句を訳しても通じず、せいぜい“How do you do?”とか“Nice to meet you”と置き換えるのが無難なところである。これらは日本語の文化要素が含まれる領域、イメージ図で言うところのAに属すると言えよう。では逆に英語から日本語に訳す場合を考えてみよう。同じように“I am Japanese”は文化的要素がないから『私は日本人です』でよいが、

“Please, come in. Make yourself at home.”

はどうだろう。『どうぞ、入ってください。自分の家と同じようにくつろいでください』ということになるのかと思うが、しっくりこないだろう。『そもそも日本

語ではそんな風に言わない』という印象をもつと思う。つまりこの表現は英語的な文化要素を含むイメージ図のCに属するのである。

実際はこの図のようにA, B, Cの三種類にくっきり分かれるわけではないのだが、ある文化圏の言語から別の文化圏の言語に橋渡しする場合、一筋縄にはいかないのを理解して頂けたかと思う。二つの言語が属する文化圏がお互い離れていれば離れているほどAとCのゾーンは大きくなり、その分、真の意味でその外国語を習得するのは難しくなる。実際にプロの通訳や翻訳家はその場その場で臨機応変に近い表現を使用したりしてスムーズな橋渡しを実現しているのだと思う。

さて、冒頭で引き合いにだした日本の学習者に多く見られる欠点は、**AとB**はマスターしたが、**C**の部分が抜け落ちている可能性が高いということである。このCの部分は、今後語学習得のテクニックを説明する上で頻繁に引き合いにだすこと

なので言語サークルの『Cゾーン』と名づけよう。

Cゾーンは日本語文化圏に存在しない概念で、それ故日本語にうまく分解できない。この学習者の頭にCゾーンが入っていない理由は簡単で『常に日本語で発想している』からである。日本語で発想しているかぎり、AとBに属する言葉や表現しか出てこないのだ。逆に言えば日本語を勉強するアメリカ人であれば日本の文化的な要素が入るAゾーンが抜け落ちる可能性が高い。

帰国子女の場合はA, B, Cが満遍なく脳にインストールされている場合が多い。だから両方の文化圏での発想ができるし理解できるということになる。実は私は帰国子女ではないが、確かに日本語と英語のソフトは別々にインストールされていると感じる。英語でしゃべる時に明らかに日本語では言わない(言えない)であろうことをしゃべっていると感じることが頻繁にあるのだ。この感覚はまるで自分が二重人格になった様な感じがし

て気味が悪かったが、その正体は言語ソフトが別々に存在しているということなのだと思う。逆に言えば、帰国子女でなくても、正しいやり方を行えば、いわゆる英語脳をインストールすることは可能ということである。あなたが真のバイリンガルになりたいのであれば、学習者の盲点であるCゾーンの存在を意識しないといけなない。その習得方法はこれから説明するが、ここまで説明した“インプット・アウトプットの法則”と“Cゾーン”という概念をもう一度読み直して理解してから読み進めて頂きたい。



ご感想を[こちら](#)へお願いします！



グウィッグして感想ちょ！

2-4 文法という大事でいい加減なもの

一定年齢に達した人が日本で外国語を学び始める場合、最低限の文法知識は必要だと思う。しかし、前章で触れた通り、文法を元に言語ができたのではなく、言語があってそれをできるだけ分解したのが文法なのである。この事実にも異論を唱える人はいないと思うが、依然として外国語教育現場では『この文の“waiting”は動名詞なのか分詞なのか』、といった不毛な議論を戦わせ、こ

れこそが外国語の勉強なのだと信じる“学者様”がいるようだ。賢いあなたは間違ってもこのような議論に参加してはいけない。結論を言えば、『そんなのどっちでもよい』のだ。あなたが目指しているのは、その言語を操るコミュニケーターであって、学者ではないはずだ。逆にあなたは日本語文法の“が”と“は”をどうやって使い分けるかを例外なく説明できるだろうか。たとえできたとしても、そんな難しいルールを外国人学習者が覚えられるだろうか。

もう一度だけ言おう。文法とは、それが英語であれ中国語であれ、『人がしゃべったり書いたりする“アナログ”且つ“いい加減”な言語というものを、なるべく体系的に説明しようと“試みた”もの』である。この解釈が正しい。だから、大事ではあるが、これを100%理解することはできないし、理解する必要もないのである。そして、あなたがこの言語を習得した時点で口から出る言葉は、『思

考から直接言語に分解されて出てくる』のが理想であるし、それは可能である。当然、その段階では、あなたの脳みそから“文法”という骨格はほとんど溶けてなくなっていないといけないのである。

皆さんも英語を習い始めたときにbe動詞の変化について覚えたと思う。be動詞は主語によってIのときはam, youのときはare, thisのときはisのように形が変化する。決して“I is a boy”とはならないのである。なぜか・・・？と悩んだあなたはすでに“学者路線”を歩き始めている。理由なんかないし、あったとしてもどこのアメリカ人もそんなことは考えてない。理由があるとすれば、『皆そうしゃべっているから』ということだけである。文法は“完成されてない型”のようなものだから、その型を何回も練習して自然に口からでるようにするのが正しい覚え方である。野球でも正しいバットを振るフォームがあると思う。あのフォームをいくら理論で説明しても身につくことはない。何度も何

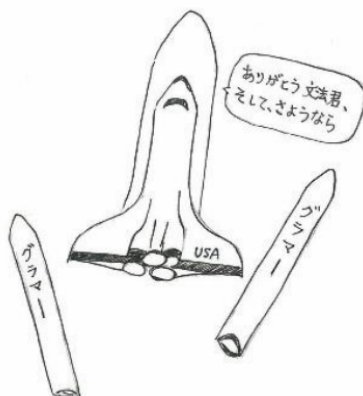
度も素振りをしながらコーチに修正してもらい、最終的に体で覚えさせるのだ。文法も同じように考えよう。『なぜ？』を考える時間があったら下記を口に出して10回でも100回でも発音した方がよい。

I am a boy. I am a boy. I am a boy. I am a boy. I am a boy. I am a boy....
You are a girl. You are a girl. You are a girl. You are a girl. You are a girl....
This is a pen. This is a pen. This is a pen. This is a pen. This is a pen....

これはあなたが日本語をしゃべる時に日本語の文法を考えることがないのと同じだ。私は正しく英語と中国語を習得したから、これらをしゃべる時も文法というものはほとんど意識することではなく、それぞれの言葉で直接意思を表現している。

初期の学習者に誤解されないように補足しておこう。“文法”は初期学習段階では非常に大事である。懸命に勉強されたい。文法は正に木の幹

であり、建物の土台である。この木の幹があつて、初めて単語やイディオムといった枝葉をつけることが可能になる。但し、この文法はもともと“不完全”なものであるから、完全に理解しようとしなくてよいということをお願いしたいのだ。理系のあなたは特に注意されたい。そして、ほとんどの枝葉が完全についた段階で木の幹の大部分は地中に埋まって見えない状態になるのが理想なのである。それは、これから説明する大量のインプットとアウトプットによりのみ可能になるのだ。今はもうなくなってしまったスペースシャトルが、打ち上げから大気圏を出る直前に鮮やかに燃料タンクを切り離したように、あなたも段階的に文法という燃料タンクの切り離しをされたい。



2-5 先天セットの訓練方法

ここからはあなたが基本的な文法を理解したという前提で実際に語学を身につけるための具体的な理論とテクニックを紹介するが、中でも先天セット(リスニング＋スピーキング)に重きを置いて説明したい。その理由の一つは言語の基本は先天セットであり後天セットはその応用であるからということ。先天セットの中でもリスニングはその大元の部分である。もう一つの理由は日本の語学教育では明らかに、この基本をほとんど飛ばして、後天セットから入るという非効率をずっと続けているからである。もし読者の中に中学、高校の英語教師がいるなら、おそらく、ご自身でもそのことに薄々気づいているはずである。今からでも遅くないから、こっそりやり直した方がよい。でないと、後に優秀な教え子から笑われる可能性が高い。

MP3 playerを手放すな

(ウォークマン等の携帯音声プレーヤー。スマホ不可)

現代の外国語学習においてスマホは絶対的に必要な”語学の神器”と言っても過言ではない。

しかし、ここではあえてスマホではなく語学用に別途**MP3 player**を持つことを強く推奨しておく。なぜならスマホはその便利さ故に他のエンタメ(Youtube等)への誘惑が強すぎるからである。

繰り返すがリスニング能力は全ての語学の根幹である。全ての人間はスピーキングでもライティングでもリーディングでもなく、リスニングという音のインプットから言語能力を発達させていく。語学学習者はこれを深く理解し、それに従った学習方法をした方がよい。一般的な語学学習者はリスニングの絶対量が足りてないように思う。リスニングで音から覚える単語やイディオムを頭に浸透させるには時間がかかる。一回や二回ではなく、何度も聞いてそれを自分が発音できるようにならなけ

れば、その言葉が本当に頭に“インストール”されたことにはならない。“Walk”という単語を見て、『歩く』と分かる程度の認識では、習得したことにはないのである。何度も聞くには、どうしても手軽に正しいネイティブの発音を聞ける状態をつくらねばならず、それを実現するには常にウォークマンなどの手軽に携帯できるMP3 playerを所有することが必須である。詳しくは[2-10の『仮想留学という考え』](#)を参照されたい。

発音とイントネーション

語学、特に英語や中国語を習得する上において、発音・イントネーションを軽視してはいけない。もう一度言おう。発音・イントネーションを軽視するでない。熱心な学習者であれば、これを聞くのは初めてではないはずだ。しかし、そのうちどれだけの人が本当に発音・イントネーションのトレーニングを継続して行っているかははなはだ疑

問だ。少なくとも中学から始まる学校での英語教育においては発音のトレーニングは皆無といってもよい。ご存知だとは思いますが、国際社会において日本人の英語に対する評価は残念なほど低い。これはドイツ人やスウェーデン人など母国語が英語と同じルーツをもつ国の人々と比較しているのでは、しょうがないとも思えるが、実は韓国人や中国人と比べてもやはり劣るといわざるを得ない。これには様々な理由があると思うが、やはり、日本人の“発音・イントネーション”がノンネイティブとして“聞くに耐える”レベルに到達してないことが理由のひとつにあると思う。この問題についての解説と具体的な解決方法を提示したい。

そもそも何故日本人の発音はよろしくないのか。理由はたったの二つである。ひとつは、日本語という言葉が必要とする発声音(発音)の領域が、他の外国語(ここでは英語、中国語)に比べ

非常に狭いということ、もうひとつは単なる練習の不足である。私達が話す日本語は“あいうえお”から始まり“ん”で終わる50音のほかに濁音や半濁音などを含めた比較的少ない種類の発音で構成されている。このため、日本語を学ぶ外国人は日本語の文法こそ複雑で難解な印象をもつ人が多いが、日本語の発音が難しいという人はあまりいない。これに対し、日本人が外国語(英語、中国語)をしゃべる際は、日本語には全く存在しない発音・イントネーションが多く頻繁にでてくる。中国語の場合はこれに加えて四声と呼ばれる声調が加わるので日本で育った我々からすれば難解なことこの上ない。我々はこれらを無理やり“カタカナ”で表そうとするが、これは語学学習上、絶対にやってはいけない過ちである。英語や中国語の発音をカタカナで表現しようとするのは白と黒の強弱で色を表現するようなもので、所詮不可能

なのである。例えば、学習初心者でも分かる、下記のような語句でも決してカタカナにできない。

『お母さん、喉が乾いた』

“Mom, I'm thirsty.”（ママ、アイムサースティ）

『妈，口渴了。』（wo3 kou3ke3 le）（マー、ウォーコーカーラ）

簡単な例文でありながら、英語であれ中国語であれ、これをカタカナで発音して実際に意味が通じることはまずありえない。学習者に発音してもらうときちゃんと発音できている人は案外多くないのだ。個人差はあるが成人してから第二外国語を学ぶ場合は、ネイティブと同じような発音・イントネーションにまでなるのはなかなか難しい。しかし、少なくともネイティブの人が聞いて、理解できる最低限のレベルまでは到達しなければいけない。最低限のレベルまで達していない人は、今か

らでも遅くないので、自然にその発音ができるようになるまで継続して練習をすべきである。

初期段階での発音の基礎はやはりネイティブの講師に舌の動かし方や発声を習うのが手っ取り早い。特に英語の“th” “LとR”の違い、中国語の四声、“zh” “gありとなし”などはこの段階で正しく覚えないと、その後何年も続く学習にもずっと影響するので要注意だ。とりあえず、下記の文を発音してネイティブがスクリプトなしで聞いて普通に理解できるまでは練習を重ねてほしい。()に示したのは日本人が混同しやすい別の単語であり、間違えると“重大な誤解”を引き起こすおそれがある。その重大さについては、ご自身で辞書を引いて確かめてほしい。

(英語)

L&R We have a presidential election next year. (erection)

We eat rice everyday. (lice)

There are rules to abide by.

S&SH Do a hundred sit-ups now. (shit up)

The sun is shining.

TH I am thinking now. (sinking or shinking)

(中国語)

ZH 我是中国人。 wo3 shi4 zhong1guo2 ren2

HE 我喝醉了。 Wo3 he1 zui4 le-

上記は私が思いついたほんのいくつかの例にすぎないので、詳しくは専門教材を参照されたい。

正しい発音はネイティブ講師のいる外国語教室などで習うのが王道ではあるが、実は私は中国語の発音は全く独学でマスターした。後にも触れるが、今の時代、インターネットの検索エンジンで“英語”、“中国語”、“発音”などと入力すれば、無料でネイティブ講師が口、舌の動かし方を丁寧に教えてくれるサイトがかなりの数ある。結局のところ、会話学校に行ってもインターネット上でもやることは同じなのだ。いや、再生ボタンを押せば何回でも嫌がらずに教えてくれる分、インターネットの方が優れているかもしれない。又、先生の映像付きの場合は大体の場合、女性は美人で男性ならイケメンの兄ちゃんだったりする。異論はあるかも知れないが、学習を継続する上で大切なのは、“楽しく、気持ちよく”であるから、あながち軽視できない要素であると思う。唯一の欠点は、ネット上では自分が正しく発音ができているかどうかをチェックしてくれる人がいないということであ

る。自分で正しい発音ができているかの判断は、かなりの部分、センスによるところが大きいように思われる。確実にやりたいのであれば、ネット上で練習をした上で会話学校でネイティブチェックを受けるのがよいだろう。

但し、発音・イントネーションの練習ははっきり言って面白くない。工夫してもこればかりは面白くしようがないように思える。しかも、最初のうちには舌の動かし方が分かって、それがぎこちなくて思うように動かないという現象がおこる。これは当然である。なぜなら、野球の素振り、空手の型、各種ダンス、等ほとんどの運動に共通するようにやったことのない動きは継続して反復練習をしなければできるようにならないからだ。外国語の発音・イントネーションも全く同じである。だからこそ、それが自然にできるようになるまで反復練習が不可欠なのである。

全ての学習過程に共通することではあるが、発音・イントネーションのように、面白くないトレーニングこそ、それを継続させる仕組みを考える必要がある。私がお勧めするのは練習前の発音を録音しておいて、定期的にトレーニング後の自分の発音と比較することである。いわゆる成長の”見える化”である。具体的なやりかたとしては、1ー2分程度のネイティブスピーカーが朗読する文章の教材を使用し、自分のトレーニング開始前の朗読をスマホに録音しておくのだ。トレーニング前の自分の録音分を日付をつけて保存しておく。発音トレーニングの効果は1日2日では現れにくい。継続して練習をして1ヵ月後に同じ教材の朗読を再度録音して聞き比べるのだ。そうすれば、以前のものと聞き比べて自分がどれだけ上達しているかが分かるはずだ。この方法は後に説明するシャドーイングにも通じるやり方で、モチベーションを保つ意味でも非常に効果的である。語学の

習得を決意されたあなたにはここでつまづいてほしくない。この面白くない過程を何とか乗り越えて次のステップへと進んでほしい。

外国語を外国語のまま理解すること
耳からの大量のリスニングは基本であるが、大体3回聞いても聞き取れないものは何回聞いてもわからない。『聞き取れない』という現象は、基本的に『その単語の存在を知らない』か『知っているけど発音が聞き取れない』のどちらかしかない。どちらにせよ、分からないものをずっと聞くのは苦痛だし、何回聞いても分からないものは分からないので殆ど無駄と言ってよい。よく音楽のように聞き流すことで『音に慣れる』というが、あれは疑わしい。モーツァルトのようなクラシック音楽であれば、“感性”で聞くから言葉が分からなくても十分鑑賞できるが、残念ながら言語は“感性”では理解できない。言語は基本的には論理を司る左

脳で理解されているのだと思う。だから聞き流すことで『音に慣れる』ことがあったとしても、それは結局意味をなさない『雑音』であり、聞き続けることには相当の忍耐が要るはずだ。『聞くだけで分かるようになる～』という触れ込みの教材が、聞くだけではなかなか続かない理由はここにある。これらの教材はリスニングを重視しているという点ではよいと思うが、全てを『聞くだけ』で習得するのはそもそも無理があるのだ。試しにスワヒリ語をyoutubeで検索して一時間聞いてみると良い。おそらくは耐えれないはずだ。

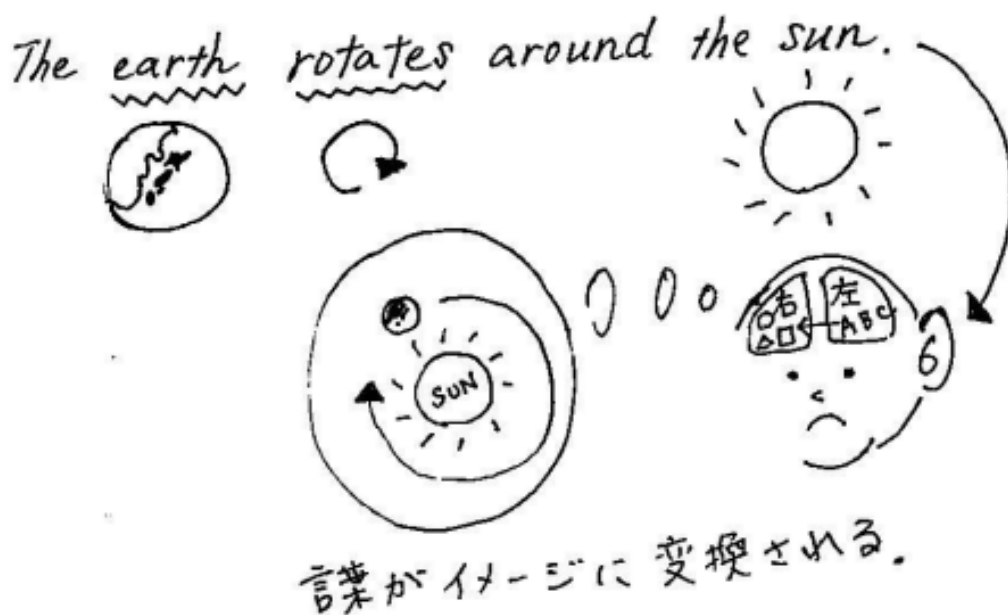
私は英語も中国語も大量のリスニングをしているが、今でも分からない単語が多く出る題材を“答え合わせ”をしないまま何度も聞くことはしない。『知らない単語』を『使える単語』にするにはテキストを見て、何という単語でどういう意味であるかを最低限確認しなければいけない。その上でリスニングを繰り返すことにより初めて記憶が強化

され、最終的に『使える単語』になるのである。リスニング教材の中には、英語や中国語の後に日本語訳が吹き込まれているものもある。これなら聞くだけで大丈夫と思われるかもしれないが、必ずしもそうではない。私が語学学習において一貫して主張するのは『外国語を外国語のまま理解する』という考えである。通訳や翻訳という作業は絶対に必要な場合を除いてはプロに任せるべきである。例えば、

The earth rotates around the sun. (地球は太陽の周りを回る)

という文を聞くと、あなたがearth (地球)とrotate(回る)という単語を知らなかったとする。正しいやり方は、先ず、分からなくても何度か聞いてみることだ。何度か聞いても分からなければ、テキストをみる。そこで初めて『なるほど、earth

か、rotateか』とその単語の存在を知る。次にあなたはこれらの意味を英和辞書で調べる。すると『earth = 地球』、『rotate = 回る、回す、etc』など色々な例文を読んでその大体の意味を理解する。そして、もう一度、同じ文章を聞く際、できれば日本語に『翻訳』せずに、頭の中が次のようになるのが理想である。



この時、耳から入った情報は日本語ではなく、あくまでイメージに変換されなくてはならない。これが英語を英語のまま理解することである。

お分かり頂けたでしょうか？この考えは、習得する言語が何語でも同じである。同じ要領でどんどん単語を増やしていき、文を聞いてそれがそのまま頭でイメージできるようになるのが正しい学習結果である。これを正しく理解すれば、言葉というものが言葉で始まっているのではなく、手に取れない概念やイメージから発して、それが英語や日本語といった言語に分解されているということがお分かり頂けると思う。私たちはOSが日本語であれ、英語であれ、『イメージ⇒言葉』、『言葉⇒イメージ』を繰り返しながら意思の疎通をしている。英語や中国語を習得するということは、このイメージを変換するソフトを複数もつ、ということなのである。

単語の覚え方

受験勉強をすでに経験された大学生以上の読者であれば、英単語を覚えるのに苦労した方は多いと思う。私も英語に関しては勉強熱心だったから、それこそ百個以上の単語帳を使って、表に英単語、裏に発音と例文、そして日本語の意味を書いて必死で覚えたのを記憶している。この方法は、“お受験”には絶大なる効果をもたらしてくれたため、私自身、否定はしたくないのであるが、実践的な語学学習という意味においては正しくなかったと言わざるを得ない。ここでは語学学習で決して避けて通ることのできない単語の覚え方について、いくつかの条件を挙げて説明したい。

基本1－3

1. 耳で覚えよう

そろそろ耳にタコができる頃だと思うが、単語は耳から覚えなさい。スマホにネイティブスピーカーの発音の教材を入れて、常に持ち歩いて耳で聞

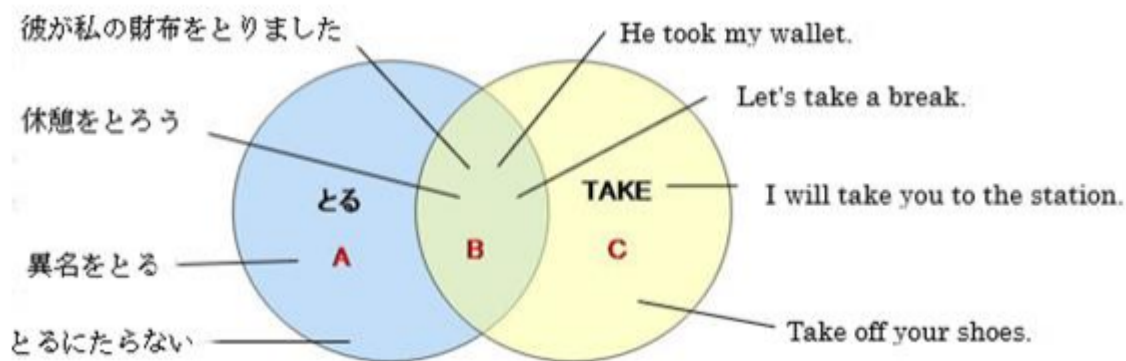
いて、覚えるのです。“お受験”で大活躍した単語帳は、引き続き使ってください。但し、基本は耳から覚えて単語帳はあくまで塾の行きがけの電車の中で見るような補足資料として使うことをお薦めする。

2. 口に出して覚えよう

あなたはどうか知らないが、私たちの多くは実は聞くだけではモノが覚えられる程賢くない。耳で聞いたことは、口に出して発音したほうがよい。大体、私たち日本人は英語も中国語もどうしようもなく発音が下手だ。最初の段階で訓練が足りないのは明らかである。但し、こればかりはどこでもここでもやってたら変な目で見られるから、公共の害にならない程度でできるだけ頻繁にやろう。

3. 例文で覚えよう(Cゾーンを理解する)

Cゾーンの説明で理解頂いたと思うが、単語は必ずしも日本語ひとつに対して英語ひとつの対応語があるわけではない。もし、『いす』を“chair”と覚えるように全ての単語に夫々対応語が決まっているなら、外国語はただの記憶ゲームになるはずだ。何度も言うが言語とは非常にアナログであいまいでいい加減なものだ。言語同士の文化圏が離れれば離れる程、全く同じ意味を持つ言葉は少なくなる。日本語にとっての英語はその最たるものの一つだと言える。例えば“take”という単語を覚えたいとする。あなたは辞書で引いてこれを『とる』と覚えてはいないだろうか。ダメだとは言わないが、それだけではあなたは“take”の意味の半分も理解していることにはならない。次に示す言語サークルの言うところのB部分だけである。



“take”の意味を本当に理解するには、takeを使った正しい例文をできるだけ多く何種類も耳で聞いて、『とる』を意識しないでもすうーっと頭に入るまで続けることである。

仮に私が今“take”を使った例文をいくつか書いてみよう。これをネイティブスピーカーに発音してもらい、録音したものを何度も聞けばよい。当然、それを自分で口に出して発音した方がよいのは前に説明したとおりだ。例文は多ければ多いほどよい。但し、正しい例文であることは必須条件だ。よほど自信がない限り自分で作ろうと考えないほうがよい。

* I'll take you to the station. (私があなたを駅まで連れて行きましょう)

* Take it easy, don't take it so seriously. (か
る一く考えて、そんなに深刻に考えるなって)

* Why don't we take a break? (ちょっと休憩
にしよう)

* Take off your shoes at the entrance. (玄関
で靴を脱ぎなさい)

One hamburger, for take-out please.

(ハンバーガーひとつ、テイクアウトで)

* I'm gonna go take a piss, OK?

(ちょっと俺、小便してくるわ)

※gonna = going toの口語形

最後の例文はあまり上品ではないが、中学、高校生の君は一気に脳がフル稼働したはずだ。このようにして例文を“印象”に残すことも一つのテクニックである。そして、最終的に“take”の意味を覚えたあなたは、それが必ずしも『とる』ではないことを実感として理解していなければいけない。

応用4－5

4. 認知スピードを上げる

単語や文章をリスニングから覚えることを説明したが、実はこの『覚えた』は実に曲者で、これが完全に自分のものになるにはいくつかのステップがある。先に例に出した“walk”をとって説明しよう。もし、あなたが“walk”を見て『歩く』と認識するけど、“walk”と聞いて、それが聞き取れなければ、あなたは学校の英語教育の重度の犠牲者であ

る。“walk”はあまりにも簡単すぎるので、“rotate”（回る）という単語ではどうだろう。どちらにしても『見てわかるけど聞いてわからない』のであれば、あなたは根本的に覚え方を間違っているから、本書を読んで改善されたい。さて、あなたが正しい順序でこの“walk”や“rotate”を覚えたとしよう。あなたはネイティブスピーカーが実際に日常会話で使う“walk”や“rotate”が聞き取れるだろうか。

- I am walking down the street.
- The earth is rotating around the sun.



あなたのレベルにもよるが“walk”は何とか聞き取れても“rotate”は聞き取れない人が比較的多いかも知れない。何故だろうか？理由の最たるものはスピードである。あなたが頭でその単語が分かっていても、相手のしゃべるスピードが速すぎてついていけないのである。何故、“walk”は聞き取れて“rotate”は聞き取れないかというと、“walk”は基本中の基本単語でああなたが今までに何度も何度も見たり聞いたりすることにより脳への浸透度が高まっているからである。“rotate”を同じだけ聞いていれば、当然聞き取れるはずだ。私が再三にわたりリスニングの量を強調するのは、聞け

ば聞くほど脳への浸透度が高まり、その分、ネイティブスピードについていける認知スピードも高まるからである。実は、大量に聞く以外に認知スピードを上げるっておきの方法がある。通常の教材のスピードを1.5倍や2倍にして聞くことで意識的に認知スピードを鍛えるというやり方だ。

昔は速聴機という特別な機械を使う必要があったが、現在はYoutubeなどでも簡単に再生速度を変えられる機能がついている。語学学習者にとって全く言い訳の余地のない環境にあると言っても過言ではない。

通常、語学教材の音声はネイティブスピーカーが学習者のためにゆっくりしゃべってくれている。このため、これらの教材スピードについていけても、実際の会話スピードではついていけないどころか、聞き取りもできない場合が多い。日本でも皆が皆、NHKのアナウンサーのようにしゃべるわけではないことを考えれば納得いただけると思

う。そこでこれらの教材を何度も聞いて聞き取れるようになったら、1.5倍にして聞くのである。1.5倍にして慣れたら、今度は2倍にして耳を鍛えていく。もちろん3倍、4倍にして鍛えてもいいが、通常2倍にして普通に聞き取れれば大体大丈夫だ。実はこの方法は、認知スピードを速めると同時に勉強時間を短縮できるという優れた方法である。中国語を独習していた2008年当時、私は中国語成語(四字熟語)のCDを2倍速にしてWalkmanに入れて聞いていた(まだスマホが普及しなかった)。300程収録された四字熟語(成語という)は全て例文とともに収録されているため、非常に分かりやすい。私は通勤の電車内で、この成語をWalkmanで聞き、2ヶ月で全部覚えてしまった。一度覚えたものを2倍速にして聞いて認知スピードを上げて、記憶を定着させたから忘れにくいのである。仮に間違えてこれらを『見て』覚えようとしたらどうなるだろうか。日本人であれば

中国の成語は読めば意味がわかるようなものが多い。300覚えるのにも真剣にやれば、そんなに時間はかからないはずだ。しかし、実際、中国人がそれを発音するのを聞いても全く分からないはずだ。ましてや、自分で発音しても全く理解してもらえない。このような“かわいそうな”中国語学習者は日本にたくさんいる。英語でも中国語でも言語であれば正しいアプローチはどれも同じである。あなたが学習する言語を使えるコミュニケーションツールとしたいのであれば、理論をよく理解した上でご紹介した方法で耳と口を鍛えながら覚えてほしい。

5. 単語を覚える順序と量

単語は闇雲に覚えればいいわけではない。言語の4要素に覚える順序があるのと同様に、単語にもやはり覚える順序がある。語学教材や語学系出版物で有名なアルクの分析を参考にと、

覚えるべき有用な英単語は入門から最上級まで
 全て合わせてLevel1～Level12まで夫々1000語
 ずつで合計一万2千語程度あるそうだ。下記はア
 ルクが有用英単語12000語をレベル別に振り分
 けた目安表である。

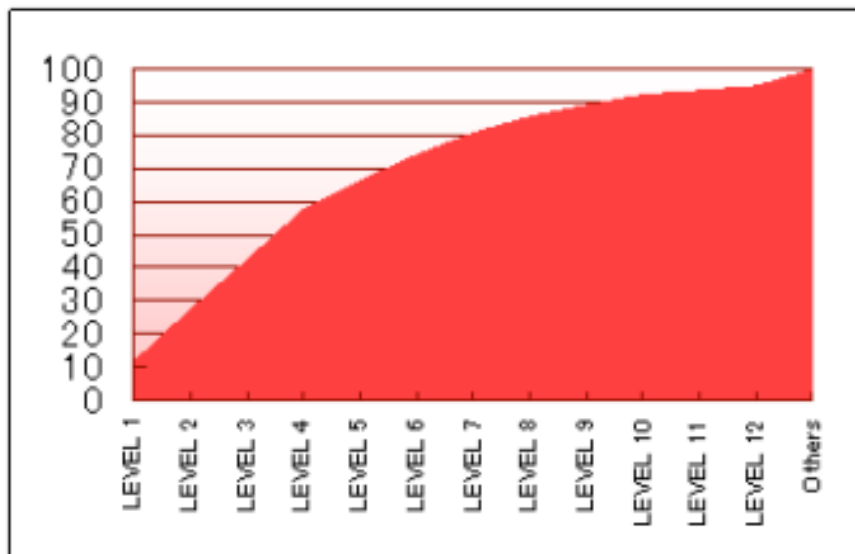
アルクによる必要単語分析

アルクによる必要単語分析

	レベル	単語数	程度	} 使いこなすべき単語
入門	LEVEL 1	1000	英語の基礎をなす必須英語	
初級	LEVEL 2	1000	日常生活で活躍する英単語	
	LEVEL 3	1000	楽しく会話がはずむ英単語	
	LEVEL 4	1000	読解の基礎を固める英単語	
中級	LEVEL 5	1000	大学受験前に覚える英単語	
	LEVEL 6	1000	検定試験に挑戦する英単語	
	LEVEL 7	1000	表現力を豊かにする英単語	
上級	LEVEL 8	1000	読解の自信を深める英単語	
	LEVEL 9	1000	TOEIC高得点を狙う英単語	
	LEVEL 10	1000	英文雑誌を楽しむ英単語	
最上級	LEVEL 11	1000	自分の視野を広める英単語	
	LEVEL 12	1000	世界をさらに広げる英単語	

このうち、最も重要なのはもちろん入門と初級である。これらは例えばアメリカであれば読み書きが苦手な子供でも知っており日常的に使っている単語やイディオムである。

私は闇雲に上級や最上級の単語を覚える前に、入門、初級までの単語を“使いこなせる”レベルにまで習熟度を上げることの方が先決だと思っている。何故なら入門や初級の単語はそれだけ使用頻度が高いから入門・初級なのであって、それ程に重要だということだからである。逆に言えばこれらの単語を使いこなす訓練をすればたとえ中級以上の単語を知らなくても最低限の意思を伝えることは可能なはずだ。



上記のグラフは同じくアルクが日常的に検索される単語がどのLEVELに属するかをグラフに表したもののだが、入門＋初級であるLEVEL4(累積4000語)までで60%,中級までのLEVEL7(累積7000語)で約80%をカバーしていることが分かる。

しかし、多くの熱心な学習者の場合、入門・初級レベルの単語はほぼ100%知っているが、“使いこなす”レベルになってない場合が多い。それは先ほども説明した“覚え方”が間違っているのが主な理由である。入門、基本レベルの単語や文章を耳で何度も聞き返し、同じことが自然に口から

出るくらいまで訓練しないと脳にはインストールされない。結果、読めるけど聞き取れないという自然界の法則を無視した“最悪の現象”が起こるのである。これらの必須単語を使用した例文を4で説明した倍速で聞き続ければ比較的短期間でインストールすることができるだろう。もちろん語彙は多ければ多いほどよいので、入門・初級を使いこなしている前提で、どんどん活用語彙を増やせばよい。因みに私は今このアルクの最上級 Level12の単語を見たが、知らない単語はまだ多くあるようだ。しかし、私はビジネスやCNNのニュースなども含めて英語で不自由することは殆どない。アルクが示すような専門会社が分析したものを参考にして、自分がどのレベルまでを習得するのか目標を立てて学習するとよい。

最強の先天セットトレーニング法

:シャドーイング

基本文法、発音の仕方、最低限の単語を覚えたら、これらを組み合わせて自分の意思を伝える練習をしなければいけない。つまりアウトプット（スピーキング）の練習である。ここでもう一度、原点に戻ってほしい。[インプット・アウトプットの法則](#)だ。忘れていたら[2-1](#)に戻って読み直してほしい。この段階ではあなたの語彙力はまだ限られており文法もあやふやである。このままの状態であなただけがアウトプット（スピーキング）の練習をすると、間違いなく中途半端で間違いだらけの表現を正しくない発音で練習することになる。何故ならインプットが足りない状態でアウトプットを試みることになるからである。しかし、インプットが十分になるのを待っていたら、きりが無い。そこで、いわゆる先天セットを両方同時に鍛える最強の方法を紹介しよう。シャドーイングである。もし、“ノーベル語学賞”というものがあるならシャドーイングという方法を発明した人にこそ贈られるべきだと

思う。それほどに、この方法は確実な効果がある。シャドーイングは近年になって注目されてきたリスニング力とスピーキング力を同時に鍛える科学的な方法で、もともとプロの通訳者などが訓練のためにするトレーニング法とのことである。やり方は簡単でネイティブスピーカーが吹き込んだ音声を聞くと同時に同じことをしゃべるというものだ。影(シャドー)のように光を追いかけるからシャドーイングと言われるようになったのだろう。筆者が継続的に実践して実感するこの方法の優れている点を下記に挙げる。

1. 母国語が介在する余地がない
2. 発音やイントネーションの訓練になる。
3. 聞き取れていない単語は発音できないため、克服する弱点が明確になる。
4. 集中力を要するため必然的に効率が高まる。
5. 場所を選ばず、家事や軽い運動をしながらでもできる。

それぞれの特徴を解説しよう。

1. 母国語が介在する余地がない

シャドーイングはネイティブが話す言葉をインプットすると同時にアウトプットするため、母国語である日本語が介在する余地がない。必然的に外国語を外国語のまま理解するようになり、また、そのままアウトプットすることによりその外国語の思考回路が形成されやすくなるのだ。つまりはCゾーンの思考をCゾーンの思考のままインストールすることができる。

2. 発音やイントネーションの訓練になる

言うまでもないが、これは非常によい発音とイントネーションの訓練になる。発音ばかりに気をとられてイントネーションやアクセントがなおざりになっている学習者も多いが、シャドーイングはネイティブの言葉の流れをそのまま真似することに

より、発音、イントネーションを含むスピーキング全体ができるようになる。

3. 聞き取れていない単語は発音できないため、克服する弱点が明確になる。



これは実践してみれば、すぐにわかると思うが、自分が知らない単語や聞き取れていない単語はシャドーイングができない。聞いた単語は脳がその意味を認知しているからこそ、再生できるのである。聞き取れなければ、その単語を別途覚えて十分に発音練習してからやれば、大体的場合次からできるようになる。教材の難易度にもよるが、

シャドーイングがうまくできない場合、原因は次のいずれかである。

1. 単語を知らない

⇒これは先に述べたとおり、調べて正しく発音できるように練習することで克服できる。

2. 知っている単語の文章だが舌がついていけない。

⇒これは練習不足、もしくはスピーカーの口述スピードが練習者のレベルに合っていないことが考えられる。集中して何とかついていける程度のスピードで練習を続け、段段にレベルを上げていけばよい。

4. 集中力を要するため必然的に効率が高まる。

聞いたものをそのまましゃべることはそもそも相当の集中力を要する。話者のスピードが上がればあがるほど、集中しないとできないため、必然的に学習効率は高まる。繰り返し練習しているう

ちに、脳で新しい回路が形成され、ほとんど無心状態でシャドーイングができるようになる。ただし、ここで注意したいのは、内容を“暗記”してしまい話者が話す前に話してしまわないことだ。それだとただの音読と変わらない。あくまで聞いたものを口にだすことによりリスニングとスピーキングを同時に鍛えることを意識されたい。

5. 場所を選ばず、家事や軽い運動をしながらでもできる。

これもシャドーイングのよい特徴だ。私の場合 Walkmanを常に携えていたため、自転車にのりながら、家で皿を洗いながら、就寝時などに、様々な“スキマ”時間を利用して訓練した。科学的に証明はできないが、私は軽い運動をしながらこの練習をする方が、シャドーイングだけのために机について練習するよりも効果が高いように思え

る。やはりシャドーイングなどのスピーキング練習は勉強というよりは体を動かすスポーツに近い感覚だといえる。

私は中学以降の英語の授業は発音と基本文法、基本単語を覚えた後の授業の半分はスマホなどのデジタルデバイスを持たせてシャドーイングを延々とさせるほうが、よっぽど実用的で効果的だと信じている。空手道場に通ったことのある人なら分かると思うが、空手の練習は通常最初の30分から1時間くらい、ずっと基本の型をやらされる。基本の正拳突きから、受け、蹴りというように毎回毎回何度となく正しいフォームで反復練習していくうちに体がそれを覚えていくのである。語学の学習者も同じように最低でも最初の10分から15分程度、基本リスニングと基本シャドーイングを続けるべきである。正しい指導者さえいれば確実に効果があり、中学高校6年間の英語学

習が実践的に何の役にも立たないという『ありえない事態』は避けられるはずだ。少なくともコミュニケーションツールとして英語を学びたいのであれば、私はスマホを肌身離さず持ち歩き、“仮想留学”することをお薦めする。やり方さえ間違わず、モチベーションを保つことさえできれば、少なくとも高校を卒業するころには日常会話はおろか、かなり高いレベルの会話も楽しめるようになっているはずだ。

筆者のシャドーイング経験

ここで自身の経験が参考になると思うのでご紹介したい。私は語学としての英語の学習はだいぶ昔に一段落ついているが、Youtubeなどで海外の番組は継続して視聴している。そこでも当然質の高い英語のインプットするようにしているが、

そのうち自分にとっての英語の先生を先述の Steve Jobs氏とObama元大統領の二人と決めている。彼らはそれぞれアメリカ経済界、政界のトップというだけでなく、話者としてもアメリカで超一流だからである(Steve Jobs氏は原書執筆中の2011年10月に死去)。彼らが行う数々のスピーチやプレゼンテーションをシャドーイングするのであるが、そのうちSteve Jobsが2005年にStanford Universityの卒業式で行った有名なスピーチが私のお気に入りである。

私は2007年のある時期から約2年間に渡り、毎朝4:00に起きると同時にこの15分程度のスピーチをシャドーイングし続けた。もう、かれこれ500回以上やっているのではないだろうか。初めころは知らない単語もいくつかあり、つかかることが多かったのを覚えている。毎日やるうちに知らなかった言葉も自分のものとなっていくのが分かった。そして、自身がそのスピーチの内容

に共感するうちに、自分の感情をこめて言えるようになり、終にはスピーチの一字一句を暗誦してWalkmanなしでできるようになった。今ではスピーチの一語一語が脳裏に焼きつき、ことあるごとにJobs氏の“Stay Hungry, Stay Foolish (ハングリーであれ、お馬鹿のままでいろ！)”という声が脳裏で再生されるようになった。私はこのJobs氏のスピーチを日本語で考えたことはほとんどない。この有名な“Stay Hungry, Stay Foolish”という決め台詞にしても、言語サークルのCゾーンに属する表現であり、日本語にはできないのだから。しかし、間違いなくスピーチの内容は私の脳に完全にインストールされ、すでに精神的な支柱にさえなっている。ここまできるとクリスチャンが毎週バイブルを読むのに近い感覚である。もちろん、一般学習者はここまでやる必要はないのだが、脳にインストールするというのはつまりはこう

いうことだと考えてよい。そこで、シャドーイングを続ける上でのいくつかの条件を挙げておきたい。

1. 良質の英語(中国語)であること(一流の語り手であることが望ましい)。
2. 自分が共感できる内容であること(そうでなければ、何度も聞く気になれない)。
3. 時間は長くとも**15分以内のもの**にすること(でなければ、まとまった隙間時間ができないだろう)。

もうひとつ大事なことは、その音声を常にスマホに入れた状態で身から離さないことだ。朝起きてから、いちいちものを探して、スイッチを入れて、など面倒くさくていやになってしまうからだ。また、Jobs氏のスピーチはレベルが高いので初級者、中級者がいきなりやると挫折してしまう可能性が高い。難易度の高くないものから徐々に

慣らしていった、最終的に自分の好きな俳優や政治家、企業家などのスピーチやプレゼンをシャドーイングできるようになるとよい。

2-6 後天セットの勉強法

（リーディング＋ライティング）

先ずはじめに聞いてみたい。あなたは本を読む人ですか？小説、雑誌、新聞何でもよいけど、いわゆる“活字”を読みますか？もし、殆ど読むことがないのであれば、外国語のリーディング能力を鍛えてもその外国語の書物を読まない可能性が高い。日本語でも読まないのに英語で読むわけがないのである。そして、読まない人は当然のごとく書くこともできるようにはならない。前述したとおり読み書きというのは『聞く・しゃべる』を応用した高度なコミュニケーション技術である。チンパンジーやイルカの中には言語を使うのもいると言わ

れるが、読み書きをする動物は人間だけだろう。人間でも“識字率”で教育レベルが計られるように、もともと後天セットは恵まれた一部の人が覚える教養なのである。たまたま日本は100%に近い識字率を誇るというだけで、外国には言葉をしゃべれるけど読み書きはできないという人は多くいる。その読み書きを外国語で覚えようというのであるから、そもそもそれは難しいことなのである。しかし、幸運なことに、日本の外国語教育における後天セットの質は先天セットほどひどくはない。改善点は多いものの、基礎の基礎はまともに学校に行った人であれば習得しているはずだ。中国語の場合は英語と違って日本人は既に漢字の80%近くを共有しているため、学校で習わなくても十分独学は可能である。ここでは、基礎的な文法は既に習得済みであると仮定して、どのようにしてこの後天セットを効率的に訓練できるかを順を追って説明してみよう。

音読が基本、正しい発音で聴覚と視覚を同時に鍛える

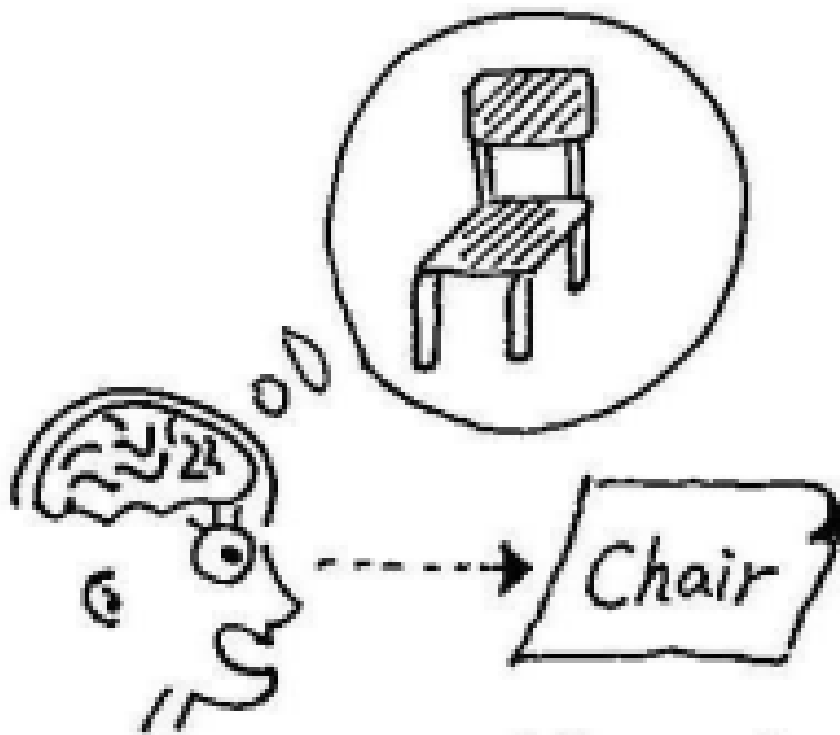
リーディング力を鍛えるにあたり、あなたは最初から黙読をしてはいないだろうか？リーディングにも順序があり、学ぶのは音読⇒黙読の順であるべきだ。これも子供の頃、どのようにして本を読むようになったかを思い出せば分かる。あなたは最初は声に出さないと読めなかったはずだ。声に出して発音することで頭の中での認知が強化されるのである。何度も音読して慣れるうちに、声に出さなくても目でみて理解できるようになる。これが黙読の始まりである。音読が基本で黙読が応用ということが分かると思う。いきなり応用からはじめるという愚行を犯してはいけない。音読を心がけよう。

但し、音読には大きな落とし穴がある。英語や中国語を学ぶ時、あなたは外国人である。あなた

の発音は決してパーフェクトではない。間違っただまの発音で音読を繰り返せば、間違っただまの記憶がどんどん強化されていくのである。これもまた、インプット・アウトプットの法則を考えれば当たり前の話だ。従って、音読もネイティブスピーカーの音声が入録されてある教材を使用して正しい発音・イントネーションの見本があるという前提で練習すべきである。先天セットの鍛え方でシャドーイングという方法を紹介したが、この方法が音読でも応用できる。要はテキストを見ながらプロが発音する入声を聞いてシャドーイングをするのだ。こうすることにより視覚でスペルを、聴覚で音を認知する訓練にになり、それを口に出すことにより発音練習にもなるのである。もちろん、この練習方法はある意味で補助輪をつけて自転車をこぐようなもので、次の段階で音声なしで正確に音読できるようになり、最終的には黙読できるようになるのがよい。

また、認知スピードを上げるにも同じ方法が使える。通常のスピードでできるようになったら音声の設定速度を上げてみよう。この場合は口のシャドーイングはやらなくてもいい。ただでさえ発音がおぼつかないのに1.5倍や2倍のスピードでやれば口が回らなくなるのは当たり前だからだ。口は閉じたままで倍速の音声を聞きながらテキストを目で追って行くのである。これ続けることにより視覚と聴覚の認知スピードが同時に高まり、脳自体の回転スピードも高まっていく。例えば、通常であれば“chair”という単語を目で見て頭のなかで“chair (椅子)”の絵が思い浮かぶまでには時間がかかっているのである。わずかな時間ではあるが、文章になると簡単な単語や難しい単語の組み合わせであるため、この認知時間がかさばって『読んだけどしっくりこない』という現象になるのだ。幸運なことにこの視覚からの認知スピードは耳からの認知スピードと同様に鍛えることが可能

である。リスニング力と同様に頻繁に出てくる
“make”, “take”, “walk”などのような基本単語ほど
視覚の認知スピードも速いはずである。あとは同
様の方法で基本単語、応用単語へと語彙を増や
していけばよいだけだ。これもまた、“つまんない”
練習であるのは事実だと思う。つまらないからこ
そ、これを続けて効果を見える化しよう。その方
法についてはモチベーションの保ち方で詳述する
ので、そちらを参考願いたい。はっきり言えること
は、これほど効果の高い練習法を私は他に知ら
ないということだけだ。



読んで“認識”するのも
時間がかかっている。

後天セットも順番はリーディング⇒ライティング

ここでもう一度、語学の真髄『インプット・アウトプットの法則』をおさらいしておこう。リスニングが十分でないとスピーキングができるようには絶対ならないのと同様、リーディングが十分でないとちゃんとしたライティングは出来るようにならない。インプットがあって初めてアウトプットができる

ようになるのである。そう言う『単語と文法を覚えれば簡単なライティングはできるはず』と反論されるかもしれない。おっしゃる通りである。例えば『I, my, me』とbe動詞の活用を学んで基礎単語を覚えれば、

私は少年です ⇒ I am a boy.

と言えるだろう。必ずしも“I am a boy”を何度も読んだことがなくても、自分で『私は少年です』を文法的に組み替えて英語に“翻訳”できるかもしれない。ここで 2-3で説明した言語サークルのCゾーンのことを思い出してほしい。この『私は少年です』や“I am a boy”は『文化的要素の少ない』Bゾーンに属するものだ。あなたが本当に理解するまで何度でも言うが、あなたが『日本語で発想』している限り、いくら英語が上手になっても真のバイリンガルにはなれないのである。何故なら、発

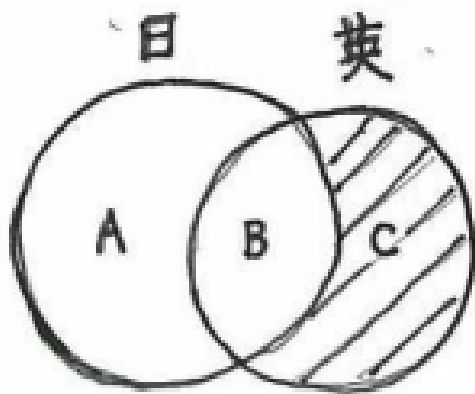
想の起点が日本語である限りはCゾーンは永遠にインストールされないからである。正確には単語と文法を学べば外国語で機械的な意思の伝達ができるようになるだろう。しかし、それはいわば暗号の作成や解読に似た非常に味気ないものであり、文化要素を含む言語というものを真の意味で使いこなしているということには決してならないのである。これは先天セットでも後天セットでも同じだ。私が外国語学習において、それが英語でも中国語でも一貫して主張するのは『**文化的要素も含めた言語一体をインストールする**』という考えであり、それをするには先天セットであれ後天セットであれ大量のインプット以外の方法はないのである。

とは言うものの、本当の意味でライティングを習得している人は日本人の英語学習者でも非常に少ない。これはリーディング量が十分でないことの証明でもある。先天セットであるスピーキング

ですら、やり方を間違えている人が殆どであるから無理もないかもしれない。しかも、リスニングであればスマホを利用して隙間時間に聞けば継続訓練が可能であるが、リーディングの場合はどうしても動かずに意識を集中しなければ理解ができない。これは慣れないうちははっきり言って苦痛である。アメリカの大学などに留学するとよいことの一つは、このリーディングを強制的にしかも大量にやらされることである。大量に読むうちに脳みそに英語回路ができていくのである。実は私もリーディングは比較的得意ではない。やはり、今でも本を読むのは日本語が一番速く脳に伝達されるようであるが、これも量をこなしていくことに比例して改善することができる。

日⇒英の翻訳はなるべくやらない方がよい？

日本の英語教育が間違っているところの一つに日⇒英の翻訳を重視しすぎているというのがある。これが何故よくないのかは前課で説明したことをよく理解していれば分かるはずである。日⇒英という時点で必然的に日本語からの発想になっているということに気づいているだろうか。そして、日本語からの発想をしている限りは英語の概念を理解できないのである。



日⇒英 翻訳は
Cゾーンを含まない

もちろん、日⇒英を全くやるなということではない。日本語で発想したことを英語で表現する力は最低限身に付けなければいけない。但し、日⇒

英をする時に多くの人が気づいてない盲点を必ず意識してほしい。もう一度確認してみよう。

『暑中見舞い申し上げます』は英訳できない。日本の文化を含むAゾーン表現だからだ。

『私は歩いて学校に行きます』は英訳できる。文化要素を含まないBゾーンだからだ。

『リラックスしてください』という英訳問題はそもそも出題されない。もともと英語にしかないCゾーン表現がそのまま日本語になってしまったからだ。あなたが日⇒英の翻訳ができないといけなのは基本的には2番目の『私は歩いて学校に行きます。』だけである。Aゾーンの表現は厳密には正確に翻訳することは不可能である。これをなんとかスムーズに意味が通るように英訳するのはプロの翻訳家の仕事であって、あなたの仕事で

はない(プロの翻訳家を目指しているのであれば、別途専門的に勉強してください)。三つ目の『リラックスしてください』を英訳すると“Relax.”の一語で用足りる。これは恐らくもともとCゾーンの表現であったが、あまりに日本でも日常的に“Relax”する場面が多くなったため、そのまま輸入されてカタカナで使われるようになったのだろう。中には間違って輸入されるものも多いが、『コラボする』、『ダウンロードする』、『クリックする』などはいずれももともとCゾーンにしか存在しなかった表現である。おじいちゃんが聞いて意味が分からないのも無理はない。あなたが学校で日本の文を英訳する際はこのような盲点が存在することを意識して、日⇒英に固執しないように気をつけるべきである。

対訳日本語を逆翻訳する訓練法

さて、従来の学習方法では言語サークルで言うところのA、BはできてもCゾーンが習得できないことは理解できたかと思う。ここではCゾーンを集中的に鍛えるために私が編み出した裏技をお教えしよう。この方法は前述の日英翻訳の盲点を逆手にとったものである。それは原書が英語である書物の日本語対訳を元の英語に戻すという訓練方法である。原文が英語のものでCゾーンに属する表現は不自然な形でしか日本語にならない。逆にこの日本語を元に、元の英語に戻す訓練をすることにより、Cゾーンが鍛えられるというものである。Cゾーンは単語とは限らない。イディオムであったり、文そのものであったり、文章全体の構成そのものがCゾーンだったりもする。前課ではリラックスやダウンロードなど、すでに日本語化している表現を例に出したが、実際はカタカナ化されてない英語独特の概念はいくらでも存在するのだ。ここでは、先述したSteve Jobsが行っ

たスピーチの中でCゾーンを含むと思われるものをいくつか抜粋してみた。

- Example 1 -

日本語対訳) 私は人生で何をしたいか見当も付かなかったし、大学がそれを見つけるのにどう役に立つかも分からなかった。

原文の英語) I had no idea what I wanted to do with my life, and no idea how college was going to help me figure it out.

- Example 2 -

日本語対訳) その時はまだ分からなかったが、アップル社をクビになることは私に起こり得る最善のことだった。

原文の英語) I didn't see it then, but it turned out getting fired from Apple was the best thing that could ever happen to me.

- Example 3 -

日本語対訳) 自分の興味と直感に従った結果出くわしたものの多くは、その後、お金に換えがたいものとなった。

原文の英語) Much of what I stumbled into by following my curiosity and intuition turned out to be priceless later on.

- Example 4 -

日本語対訳) お前の時間は限られているんだ。別の人的人生を生きて時間を無駄にするんじゃない。(＝お前自身の人生を生きるんだ)

原文の英語) Your time is limited, so don't waste it living someone else's life.

- Example 5 -

日本語対訳) ハングリーでい続けろ! 愚かなまま
までいいのだ。

原文の英語) Stay hungry, stay foolish.

この日本語訳を読めば、もともとは外国語であったものと察しがつくと思う。この日本語をみて、もとの英語に戻す訓練をすることにより、逆にCゾーンが鍛えられるのである。もちろん上記は私がよく知っているスピーチから引用したサンプルであって、実際には自身のレベルにあった教材を探すとよい。基本的にこの方法は別の外国語でも同じように応用できる。実は私はこの方法を使って中国語のライティングを鍛えた時期があった。日本語と中国語は英語ほど離れてないが、やはり文法構造が全く違うため、中国語の日本語訳を元の中国語に戻すという訓練も同じように

中国語思考回路をつくる優れた訓練方法だと言える。又、怠け者の私はこれも日本文を声に出して録音してWalkmanに入れることにより、隙間時間を使って頭の中で中国語原文に組み替えるいわばイメージ・ライティング訓練も行った。私が考えたこの方法は一つのやり方として有効であるが、唯一絶対のものでは決してない。手の届きにくいCゾーンを如何にして効率的に脳に入れるかを意識して、あなたなりの方法を見つけられればいいと思う。繰り返すが、基本は良質の大量インプットである。

後天セットは整理された思考である

さて、後天セットが先天セットに比べ高度なテクニックだと言ったのには言語の4要素を学ぶ順番とは別に理由がある。もしあなたが“先天セットをそのまま文字に書き写したもの”が後天セットだと思っているのであればそれは間違いである。例え

ば、あなたがLineやWechatで会話するために文字を書いて伝達しているが、これはいわゆる“ライティング”ではない。英語や中国語のリーディングやライティングを鍛えるために、これらのチャットに参加することは有効だろうか？結論から言えば、先天セット(リスニング＋スピーキング)レベルでの会話力をつけるには有効であるが、本当の意味で後天セットを鍛えることにはならない。何故なら**本来のライティングとは『整理された思考を文字で表したものの』**であって、頭にあるものをそのまま口から出す先天セットとは思考の質が違うからである。もし、日常的に会話する時に口から出る表現が新聞記事のようにオルガナイズされたきれいな文章であるならば、この会話の当事者は相当高いレベルのコミュニケーターである。通常は口から出るものをそのまま書いても、きちんとした文章にはならない。LINEやWechat上での会話は口語を文字表しただけのもので、

リーディングやライティングとは本質的に異なるのである。後天セットは書面に表す前に頭に浮かんだ“もやもや”した思考を一度論理的に整理するプロセスがある。この点が先天セットと決定的に違う点で、人間にしか出来ない高度なテクニックなのである。この意味において日本人でも新聞記者のように日本語できちんとしたライティングが出来る人はそう多くはない。また、最近では日本語を流暢に話す外国人はそれほど珍しくなくなったが、きちんとした日本語のライティングが出来る外国人は非常に少ないはずだ。お会いしたことはないがパクンマクンのパクンでも流暢にしゃべる程に書くことはできないのではないだろうか。同様にあなたが英語をペラペラにしゃべることができたとしても、真の意味でのリーディングやライティングは、一つ上のレベルの教養になるのである。そして、英語ネイティブから見た場合、往々に

してあなたのライティング能力の善し悪しによって
教養レベルが判断されるのだ。

英文ライティングの本質を理解する

真の意味で英語でのライティングを習得すること
がいかに難しいかを、少しはお分かり頂けたか
と思う。しかし、これだけグローバル化が進んだ
社会ではビジネス上で英語で海外とコレポンをし
ている日本のビジネスパーソンは相当な数に上
るはずだ。上記の説明を読んで『そこまで苦労は
してないが、不自由なく海外とメールのやり取り
はできている』と感じている人も多いと思う。実は
その通りで、ビジネス上のやりとりの多くは私の
言う『文化的要素』は含まない。何故なら、英語が
グローバル言語として世界中で使われる現在、ノ
ン・ネイティブ同士で英語でやり取りをする機会
の方が多いからである。例えば、中国人とコレポン

する際も双方がお互いの言語を知らなければ英語を使用することになる。しかし、中国側も日本側も英語力が『文化要素』レベルまで(=Cゾーンを理解するレベルまで)達していることは非常に稀なのである。従ってお互いが、英語で無機質な表現で意思の疎通を図っているのである。メーカーの貿易部などで必要な下記のような表現はその典型である。

* We will ship product A by courier today so it should arrive there by this weekend.

(来週末までにそちらに届くように製品Aを本日クーリエで出荷します。)

* We have not confirmed your payment. Could you please check again?

(お支払いが確認できません。ご確認いただけますでしょうか?)

* We found some defects in the last shipment.
(前回の貨物に不備が見られました。)

* Our revenues for fiscal year 2022 is 10%
higher than that of last year.

(2022年度の収益は昨年度より10%増えました。)

これらのやりとりではビジネス上の意思疎通という意味での目的は達成できるが、真の意味での英語ライティング能力の向上は期待できない。これらの文章は英語でも日本語でも中国語でもほぼ同じ意味の翻訳ができる。つまり、言語サークルで言うところのBゾーンの表現である。しっかりと英語を勉強された方の多くは、このレベルはクリアしていると思う。

さて、あなたが大多数の英語学習者から一歩二歩前に進みたいと考えているのであれば、言語サークルのCゾーンを含めた表現を習得しなくてははいけない。実はこのCゾーン、一部の動詞や文だけに存在するのではなく、文章全体の構成にも含まれる非常に厄介なものである。厄介なだけに、これを習得したあなたは間違いなく一般学習者レベルから抜きん出ることができるだろう。

上手なライティングのために大量のリーディングが必要であるのは前提であるが、その最終ゴールとしてのライティング能力は英文ビジネスレターを書く際にそのレベルが最も表れると思う。そもそも、あなたは英語での正式なビジネスレターを読んだことがあるだろうか。もし、見たことも読んだこともないのであれば、到底それを書けることなど期待はできない。

次項に一枚の英文ビジネスレターを掲載したのでご覧頂きたい。これは架空の国内メーカー

EMW社(East meets West)のやすもとゆうしん
ディレクターがアメリカ進出のために代理店候補
ORANGE HOUSE社のオバマ社長へパートナー
シップを打診するために書いたものである。実は
英文ビジネスレターは、語彙、文体、全体の構成
などあらゆる面で文化要素が含まれるCゾーンの
塊のようなものである。イギリスやアメリカで文化
が違いうように、このビジネスレターのフォーマットも
種類はあるが、どの形式にしても、フォーマットに
沿った構成や表現で文章を書くことができれば、
間違いなくノン・ネイティブとしても一目置かれる
ようになるだろう。これも逆に考えればよく分か
る。例えば、日本語ができる中国人が日本の会
社に新規の取引を申し込むために書面で挨拶を
するでしょう。日本語ができる中国人は相当な数
いるはずだ。しかし、日本のビジネスレターの形
式にのっとして、きれいな文章が書ける人がどれ
だけいるだろうか。ご経験があるかもしれない

が、実際は非常に少ないのである。もし、その中で季節の候にはじまり、複雑な敬語を使い分けてきちんとした文章で書いてあれば、受け取った側の信用度は全然違うはずだ。全く同じことが英語でも言えるのである。Cゾーンも含めて理解した学習者が伝統的な英文フォーマットに基づいて格式高い文章で書けば、受け取り側は間違いなく返事をしてくるはずだ(取引をしてくれるかどうかは別問題であるが)。すでに取引関係のある海外のビジネスパートナーとのやりとりは上記に示したような『無機質会話』だけで関係が維持できるかもしれない。しかし、実力の差が明確にでるのは、新規開拓との折衝などにおいて、相手側にあなたの教養レベルが測られる場合なのである。そして、これができればあなたは社内でも珍重されること間違いない。



1234 Musashinitta, Ohta-ku, Tokyo, Japan

September 26, 2011

TARO OBAMA
CEO
ORANGE HOUSE, Inc.
Clinton Avenue 123, MN55336, USA

Dear Mr.Taro Obama

I am writing this letter to share with you an interesting business opportunity.

Our company is a specialized manufacturer of AAA, which has enjoyed a stable demand in the Japanese market for the past 50 years. Despite the fierce competition in the niche market, our sharp edge in technology has allowed us to maintain No.1 position in Japan since its establishment 50 years ago.

Because the domestic market is very close to "occupied", we are now looking for opportunities for further growth in overseas market. After our careful study, we came to the conclusion that your company would fulfill most of our desirable conditions for distributorship of our products in your territory, and that we should be able to enjoy further business growth for mutual interest.

It would be very appreciated if you could carefully consider our offer and let us know your idea before end of this month. Further information about our company can be referred to at the following site: <http://gogakunotensai.com>.

We are looking forward to your positive reply.

Sincerely,

Yushin Yasumoto
Nanchatte Director
EMW Inc.

決まり文句

署名

差出人名

タイトル

会社名

では、どうやったらビジネスレターが書けるようになるのかを考えてみよう。例えば、あなたがCゾーンを理解していない従来の英語学習者だとして、『翻訳』の発想が身についているあなたは、『えーっと、先ずは挨拶の言葉だから・・・』と考えて、

貴社ますますご盛栄のこととお喜び申し上げます。

⇒ I am very pleased to expect that your company's business is growing well.

この時点であなたは既に失格の烙印を押されかけている。この一文だけで既に言語サークルにおける2つのミスを犯している。先ず、この『貴社ますます・・・』ではじまる一文が言語サークルのAに属することを、普通レベルの語学センスをもっている人なら分かるようなものである。これを必死

で英語に直訳した努力は認めよう。しかし、Aゾーンに属している以上、あなたの苦労は正に“徒労”であり、英語ネイティブにこの文の真意が理解されることはないだろう。よくても『変な外国人が書いてるが、まあ、気持ちは分からんでもない』といったところなのが現実なのだ。では直訳ではなく、『英語風』に変えてみよう。

貴社ますますご盛栄のこととお喜び申し上げます。

⇒ I hope your business has been well.

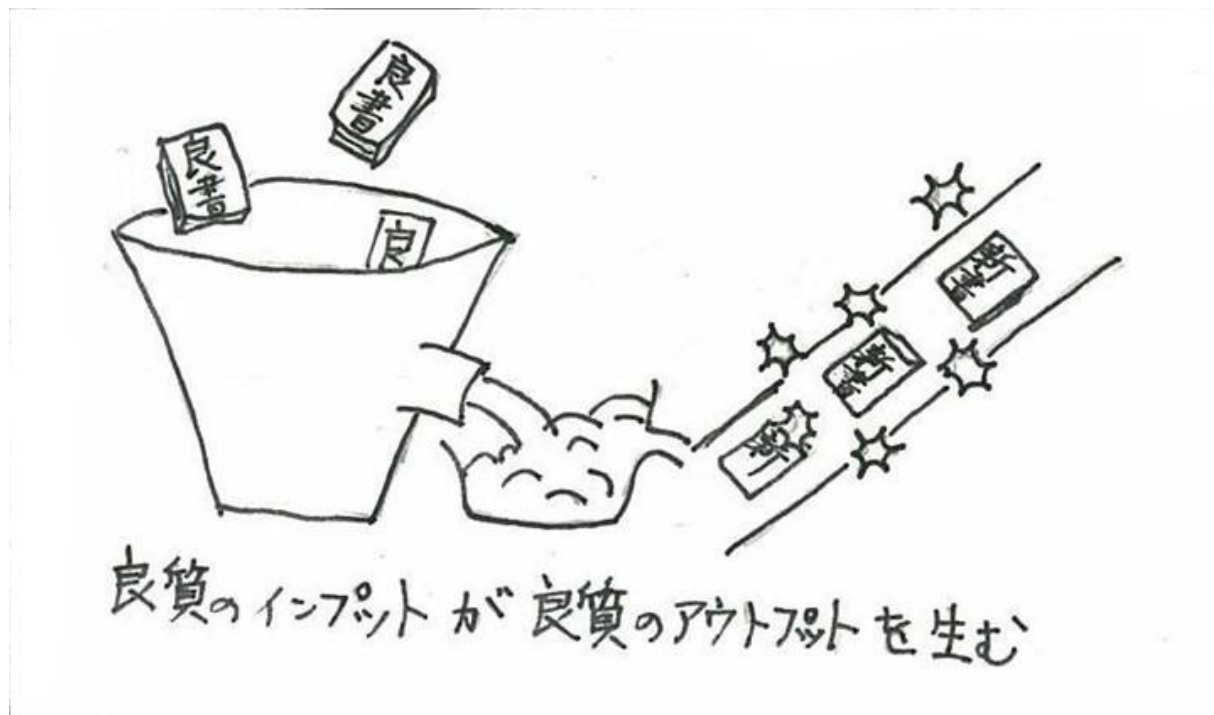
これはまずまずだとは思う。なぜ『まずまず』で正解とは言えないかというと、正式な英文レターにおいて、この手の挨拶の句は必ずしもあるわけではないからである。新規の取引であれば、いきなり自己紹介からでいいだろう。つまりは、日本のビジネスレターでよく見かける『貴社ますます

す・・・』の挨拶は、夫々の構成要素が英語に存在しないだけでなく、その概念すら日本語と同じレベルでは存在しないのである。これは日本語と英語ではひとつひとつの言葉の意味も違えば、発想そのものも同じではないということを意味している。言語というものが文化そのものであるという意味が少しお分かり頂けたかと思う。

では、どうやったらちゃんとした英文レターを書けるようになるのだろうか。痛い質問であるが、実はこれもまた、大量のインプットしかないのである。外国語を習得するのであれば、2-1で説明した語学の真髄を何度でも口に出して必ず覚えて頂きたい。『良質のインプットが良質のアウトプットを生む』のである。よいスピーチができるようになりたいのなら、よいスピーチを聞いてマネすればよい。高レベルのライティングができたければ、高レベルのライティングを読んでマネすればよいのである。但し、そのままマネしてしまうと、

それは『盗作』行為になってしまう。特に欧米では作家などが使った独特の表現などをそのまま使用すると“plagiarism(盗作)”として犯罪扱いされるから気をつけなければいけない。もっとも、我々のような外国人のレベルでそうなることは先ずないだろう。要は良質の材料を大量に吸収することによって、それらの表現が自分のものになり、自然に自由にそれらが使いこなせるようになればよいということである。私が例として掲載したオバマ社長に宛てたこのレターも最初から英語で発想して書いている。というよりも、英語で発想しないと書けないのである。相当量のインプットを意識して行っているから、自然と自分に合ったレベルの表現が出てくるようになっているのだと思う。結局はスピーキングもライティングも良質のインプットが元になるという意味では同じなのである。

ただ、『良質の英文レターを何度も読んで書き写す』という作業は、面白くないかもしれない。もちろん、絶対効果があるから、根性のある方はお勧めする。私の場合は怠け者だから、このようなライティングの訓練さえも耳からの学習を応用している。大量の英文レターを自分で声に出して読んで録音するのだ。そして、Walkmanに入れて何度も何度も繰り返し聞くのである。そうすれば使う単語のスペルさえ覚えていれば、書き写す作業とほぼ同じ効果が期待できる。何度も聞けば自然に脳に浸透し、書く時も殆ど無意識にそれがアウトプットされる様になるのだ。但し、自分の発音に自信がなければ、他の英語ネイティブの人をお願いするなどしたほうがよい。発音もまた、良質のインプットが良質のアウトプットを生むのだということをお忘れなく。



西洋言語は論理的

日本語と英語はルーツ的にお互い離れた言語であり、それだけ翻訳できないAゾーンやCゾーンが大きいことをご理解頂けたかと思う。この言語サークルに関連して、日本語と英語の間にもう一つだけ違うと思われる部分の話をしたいと思う。何故なら、この違いだけはどうも大量のインプットだけでは身につかないと思われるからだ。それは『論理的思考』というやつである。最近、向上心のあるビジネスパーソンの間では、このlogical

thinkingというものを学ぶことがビジネスの基本とされているようだ(ついでに、thinkingを“シンキング”と表現するのはやめよう。恥ずかしい)。論理的思考とは一言で言うならば、ある事柄を主張するために、それを主張するための根拠を客観的に説明できるということである。例えば、あなたがビジネス上の会議でいくつかの選択肢から一つを選ばなければいけないとする。“I think proposal A is the best choice (私は提案Aがベストだと思う)”といったときに“Why?(何故?)”と聞かれて、それに対する根拠を述べるのである。あなたがもし、“Well, you know, because I feel proposal A is somewhat, you know, good, I mean...(え一つ、つまりその、提案Aの方が何ていうか、あの・・・)”というような答えでは誰一人として納得してくれない。例えば、“2 reasons. Reason No.1 is that it is most cost effective. No.2 is that it is easy to execute (理由は2つ。

一つは費用対効果が高いこと、もう一つは実行しやすいことだ)”と答えるのが論理的な思考である。日本人はどういうわけか、この論理的思考が苦手のようなのだ。日本の会社の会議でも論理的に議論されることは少なく、何となく声の大きい人とか、力のある人に意見が平均化されて、何となく決まる・・・というのが一般的ではないだろうか。私は個人的には国会でのやりとりや、首相選出の際のプロセスを見ると、日本の会社の縮図を見ているような気がしてくる。その意味でこの問題は根深く、日本人の英語下手の理由の一つになっているのだと思う。

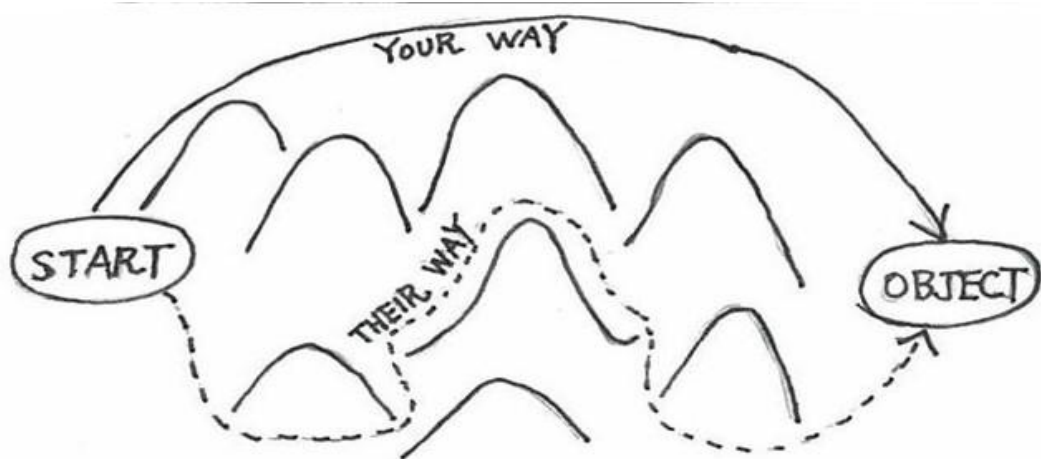
英語という言葉は非常に直接的である。日本語のように『遠まわしに何となく理解してもらおう』というような意図は全くない。ある主張をする場合に喩えそれが多少強引であっても、必ずその根拠となる理由を持っている。それに対して、理にかなった反論ができなければ、相手が正しいという

ことを認めることになってしまいかねない。しかし、実際の欧米人と日本人のビジネスミーティングなどの場で、日本人がYesなのかNoなのか分からない見解を言うのに対して、多くの欧米人はその意図が分からずに困惑してしまうのである。日本の戦後の占領政策において「従順ならざる唯一の日本人」と称された白洲次郎が当時のアメリカ占領軍であるGHQ宛に送った通称『ジープウェイレター』をご存知だろうか。この書簡は非常に貴重なもので、英語での思考と日本語での思考の違いをイラスト付で分かりやすく表している。

“...Your way is so American in the way it is so straight and direct. Their way must be Japanese in the way it is round about, twisted and narrow. Your way must be called an Airway and their way Jeep way over bumpy

roads.....” (国立国会図書館ホームページより引用)

(・・・あなた方のやり方はとてもアメリカ的で直線的でダイレクトだ。彼ら(日本)は狭い道を曲がりくねるように日本的である。あなた方が飛行機であるとすれば、彼らはでこぼこ道をゆくジープだと言える・・・)



白洲が描いたイラストの写し
(安元描)

これは70年以上前の日米のやりとりにおいて、すでに思考の違いが明確に存在したことを証明している。この時のアメリカのAirway思考が、多少は強引なものだったとは思いますが、論理的な思考だったのだろうと私は推測する。Cゾーンや論理

的思考を理解しないで英語を習得することは、このジープに乗ったまま言葉だけ英語でしゃべっているようなもので、結局、効率的な意思の疎通が成立しないのである。私はこれは英語力の問題というより、思考そのものの問題だと思っている。**TOEIC**で満点を取ったということと、この問題の解決はあまり関係がないのである。しかし、英語という言葉を一つの思考ツールとしてインストールできれば、この論理的思考もパッケージとしてついてくるだろうとも思う。日本でlogical thinkingの講座があるように、これは日本語でも当たり前に行えることであるから、まずは日本語でそれが出来るようになることが先決なのかもしれない。そして、この能力は文章を書かせた場合に明らかにその優劣が見えてしまうのである。

2-7 総合力の鍛え方

言語の4要素、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの鍛え方について順序だてて詳しく説明したつもりだが、ご理解頂けたでしょうか。基本的には先天セットは訓練、後天セットは机上の勉強を継続することで一定レベルまでは身につけることができるはずだ。当然、これらの能力は個別にある程度まで向上させなければいけないが、実を言うとこれら全ての総合力を一気に鍛える方法がある。プレゼンテーションである。社会人の読者には説明する必要はないと思うが、プレゼンテーションとは複数の聴衆の前に立ち、口頭でモノを説明したり、説得を試みたりすることである。ビジネス上のプレゼンはパワーポイントなどを補足資料として見せながら行うことが多い。日本人は一般的にプレゼン下手だと評価

されるが、すでに英語下手の我々が英語でプレゼンするわけだから、得意な人は極めて少ないと思われる。前述したが私はSteve Jobsの大ファンであり、彼が行うプレゼンは全て見ている。



時折ユーモアも交えながら、その情熱を全身で表現する彼のプレゼンは本当に聴衆を魅了する。彼のプレゼンを何十回とスマホで聞くことにより、彼が使用する表現や間の取り方が段々と自分の頭に入り、気づいたら自分のものになっているようだ。

さて、プレゼンテーションが何故、総合力を鍛えることになるのだろうか。簡単に言えば、上手なプレゼンテーションには先天セット、後天セットの全ての要素が含まれているからだ。先ず、聴衆が聞き取れるだけの発音・イントネーションを習得していないといけない。口から出る表現は全てインプットからの反映であるからリスニングが相当量ないとできないはずだ。聴衆の前で10分～20分、場合によっては1時間以上しゃべるのであるから、スピーキング能力がなければできないのは言うまでもない。後天セットであるリーディングとライティングは一見関係ないように思われるかもしれないが、そうではない。効果的なプレゼンはしゃべりたいことをべらべらしゃべるのではなく、その論理構成が非常に重要である。英語や英語と同じ言語ルーツをもつ欧米人は特に、論理的でない話をあまり理解しない。論理立ててしゃべる

には思考が整理されている必要があり、そのためには

伝えたいことが書き出せてないといけないのである。矛盾するようであるが、人は書く以上のことを話せないのである。ここでいう書くとは当然筋道を立てて書くということである。当然、書けるということは読めることが前提になっている。従って、効果的なプレゼンができるということは、それ自体が先天セット、後天セットの全てを兼ね備えていることの証明になるのである。

仕事上で英語でプレゼンをする機会は海外出張が多い営業マンや外資系企業に勤める人などを除いては、そう多くないだろう。したがって、自己練習がメインになる。効果的な練習方法を説明しよう。最初から30分、1時間レベルのプレゼンをやろうと思ってもできないから、5分という短いプレゼン練習から始めよう(実はいきなりやると5分でも長く感じるものであるが)。先ず“お題”を決

める。テレビや新聞を見ながら時事的なトピックを見つけ、それについての自分の考えをまとめるのである。例えば、『xx首相が辞任を表明した』ことについて、どう思うか、次期首相はどうあるべきか、などを考えるのだ。気をつけないといけないのはグチや悪口を言うのではないということだ。論理的に考えがまとまったら、それを紙に書いてみる。その際、一字一句書くのではなく、ポイントを押さえて箇条書き、またはロジック・ツリーにして書いたほうがよい。書いたのを読むだけだと、単なる音読と変わらないからだ。書き終えたら、最初はそのメモ書きを持ってもよいから時間を計って5分でそれをしゃべってみる。やると分かるが、これは簡単ではない。そもそもあなたが色々な事象に対して考える訓練をしていないと、『考え』自体が沸いてこないからだ。これはよく見られる現象で、日本人で珍しく英語が上手だが、『考え』がないという人は意外と多い。申し訳ないがこ

のような人が国際社会で通用することは先ずない。考えを構築するという能力も面白いもので継続してやると筋肉のように力がついてくる。慣れてくるとお題を渡されて5分程度で考えを構築し、それを口頭で論理立てて言えるようになる。トピックは政治でなくても趣味でも家族についてでも何でもよい。もちろん私もプロのようなレベルではないが、継続することで上手になるというのは自身も実感するところだ。プレゼンは英語だけでなく、日本語でも必須のスキルになりつつあるので、本書とは別に専門書を読んで勉強されるとよい。私のお薦め著者及びスピーカーはBrian Tracy(ブライアントレーシー)である。彼の話の聞けば、英語力、プレゼン力が同時に鍛えられるから一挙両得である。又、自己練習をするほか、『トーストマスターズクラブ』のように同じ志を持つもの同士でプレゼンの練習をする場も

あるようなので、このような場所を積極的に利用
するのもよいだろう。

ご感想を[こちら](#)へお願いします！



グウィックして感想ちょ！

2-8 教材の選び方

現在、書店には英語も中国語も大変な数の教材が売られている。中には非常に優れたものもあれば、どう考えても“イカサマ”なものもある。語学の学習者は効率的な学習をすすめるために質の高い教材を見極める必要がある。ここでは良い教材のポイントをいくつか挙げてみたい。

辞書

語学学習をする上で辞書は必需品だ。その昔（昭和時代）、辞書を選ぶ際に時々“根性論”を持ち出し、『一度引いた単語は忘れないようにちぎって食べるんだ』のようなことを言う人がいたが、この手の人に耳を貸してはいけない。あなたが目指すべきは“ヤギ”ではなく異文化コミュニケーターだ。辞書の目的は知らない単語の意味を知って覚えることである。ほんの20-30年くらい前までは紙媒体の辞書しかなかったが、現在は電子辞書が主流となり音声で発音してくれるものもある。

原書を書いた10年前からもすでに時代は進化しており、現在はスマホ内のアプリで優秀な辞書がいくつも存在する。

何度も繰り返すように単語は音で覚えるのが原則であるから当然音声がついていたほうがよい。現在の電子辞書は非常に優れていて、一度引い

た単語を辞書内の単語帳に登録する機能がついている。通常人は一度単語を引いて覚えてしまうほど賢くないから、この機能を利用して週に一度曜日を決めて、その週に引いた単語をおさらいするとよい。私の場合は(10年前)、CANONのWORD TANKで中国語単語を引いて単語帳に登録しておき、週に一度これらをエクセルに書き写すと同時に、これら一語一語の音声をWalkmanに累積録音していた。中国語は日本人なら漢字が分かるから読んで分かった気になっている場合が多い。そのため、逆に単語そのものを音で聞いて、すぐにそれに対する漢字が出てくるように訓練するのである。今ではこんな面倒くさいことせずともスマホ一台とアプリで事が足りるだろう。

当然、電子辞書だけでなく、ネット環境があればアルクの英辞朗を始めとしたサイトを利用するといい。インターネットの辞書の場合、新しい単語も

次々に更新されていくのであなたがスペルを間違っていない限りほぼ100%の確率で見つけることができる。間違っていたとしても“もしかして・・・”と辞書が推測してくれる機能がついているものもある。

言語サークルのCゾーンの概念を理解したあなたは分かると思うが、どんな優秀な日英辞書でも100%の説明はできない。なるべく多くの正しい例文が掲載されているものがよい。日英も日中も100%の説明ができない以上、一定レベルまで達したら、英英、中中の辞書を使うことをお勧めする。そうすればCゾーンも含めた概念から理解できるようになるはずだ。

又、中国語を勉強する人は既に英語をある程度習得している人が多いので、そんな人は中英のネット辞書を併用することをお勧めする。何故なら、中国でも日本語よりは英語を学ぶ人の数の方が圧倒的に多く、その分当たり前に中英サ

イトの方が明らかに充実しているからである。いずれにせよ、これから辞書を購入したりする場合は、合理的な立体型学習のできるものを選んだ方がよい。多少の投資になるとしても、学習効率を考えれば大体ペイするはずだ。私自身、かれこれ10年以上、紙媒体の辞書を引いてない。恐らくいずれ時代とともに紙辞書は殆ど姿を消してしまうだろう。

単語集

よい単語集の条件を3つ挙げてみよう。

1. 入門・基本・応用のように、ある程度ランク付けされているものがよい。

繰り返すが、あなたが“使いこなす”レベルまでならないといけないのは入門・基本レベルである。

2. CD(音声)がついていること。

最近では当たり前になったが、必ずネイティブスピーカーの音声収録されているものでないといけない。単語は耳から覚えるのである。

3. 単語の例文がついており、ネイティブスピーカーがこの例文を読む音声も収録しているもの。これは意外と盲点で、ネイティブスピーカーが延々と単語だけを発音するものが未だに多い。これらは使えないから買ってはいけない。

理想は単語をネイティブスピーカーが発音した後、一応の日本語訳を一言言った後、その単語を使った例文を再度ネイティブスピーカーが発音してくれるものがよい。この場合も日本語はあくまで補助で、英単語と一対の関係でないことは意識していないといけない。又、例文は多ければ多いほど、その単語の本当の意味が分かってくるか

ら、すでに持っている単語集と収録単語がかぶっているとしても、上記の条件を満たすのであれば購入する価値は十分にある。これを具体的な目標と期日を決めながら継続し、語彙力を段段と高めていくのである。先に紹介した倍速スピードで認知スピードを高める方法を利用して、ある時点での自分の認知度を記録し、一ヶ月たった後の自分と比べるなどして、段段と自分が成長していることを『見える化』することが大事だ(2-9モチベーションの保ち方を参照)。この段階の勉強ははっきり言ってつまらない。つまらないからこそモチベーションを保つテクニックが必要なのだ。我慢して継続し、上級レベルの単語量が身に(耳に)ついた時くらいから、市販の“教材”を卒業し、YOU TUBEなどによる実践英語にトライできる。このレベルに達すると自身の興味のあるものを選ぶことができるようになるため、リスニングが楽

しくなるはずだ。後は日常化するまで聞き続け、自分のものにすればよい。

シャドーイング教材

シャドーイング教材は英語も中国語も最近になって内容が充実してきた。良い教材の条件は単語集のそれとかぶるが一応、以下に挙げておこう。

1. ネイティブスピーカーが音声を収録しているもの

説明する必要はないはずだ。間違っても自分の音声を録音して、それをシャドーイングするような愚行を犯してはならない。

2. あなたのレベルにあったスピードで収録してあること

最終的にはネイティブのアメリカ人のようにスムーズな発音とイントネーションでしゃべるようになるのが理想であるが、いきなりやろうとすると間

違いなく挫折するので注意しなければいけない。
最初は誰でもゆっくりのものからスタートして、段
段とレベルを上げていくのが王道である。

3. スクリプトがあること

シャドーイングの特性のひとつで『聞き取れない
ものは発音できない』というのがある。例えば、
“This is a pen”をシャドーイングするには
“This”, “is”, “a”, “pen”全ての単語を既に知ってい
ないと正しく発音できない。従って、聞き取れな
かった単語を確かめるために、全ての教材には
スクリプトが必要である。最初の慣れないうちは
スクリプトを見ながらのシャドーイングでもかまわ
ない。その際、注意しないといけないのは、あくま
で音声を聞いてその後をついていくことである。
音声の前にスクリプトを読んでしまったら、単なる
音読と変わらないので効果が半減する。

シャドーイングも単語集と同じように、レベルが上がってくれば最終的には教材を卒業して、自分の好きな企業家や政治家などのスピーチやプレゼンを使用すればよい。前述したが、Steve Jobsなど一流の話者のものをお薦めする。良質のインプットが良質のアウトプットを生むということをお忘れなく。

文法書

文法書はいくらでもあると思う。基本的に学校が提供するもので十分だと思われるが、あえてアドバイスするとしたら詳しすぎないものがよい。前述したとおり、7－8割おさえる程度のいい加減さで、大量のリスニングによりのこりの2割程度のCゾーンを埋める考えのほうがよい。中国語でも考えは同様。中国語文法は英文法ほど難しくないはずだ。

英語対訳本

中級程度までは対訳付きで音声のあるものが望ましい。日本語対訳をもとの英語に戻す練習をすることで、Cゾーンを鍛えることが可能になる。全て発音できるようになってから目で読む練習をすればよい。上級者以上になると、後で紹介するKINDLEがすばらしい。この電子本は画面上の文字が紙上のインクと変わらないほど目に優しく、辞書ツールで知らない単語はボタンひとつでその場で調べられる。当然、日英ではなく英英の辞書である。言葉の本当の意味を知るには本来これが最も良い。

お薦めしない教材

これだけ語学産業が盛り上がると当然“インチキ”な教材も出てくる。現在は書店でなくてもネット上でのダウンロード販売など、形態も多様化してい

るため、どうしても“インチキ”割合も高くなってしま
う。ここではあなたがババをつかまされないため
に注意する点をまとめた。

1. “一ヶ月で・・・マスター”、“聞くだけで・・・”に
は注意すること。

ここまで読み進めたあなたは理解していると思
うが、語学には効率的に学習しても2年、3年単位
の時間がかかる。“一ヶ月で～”などのタイトルの
教材は楽をしたい学習者をひきつける
ためのキャッチコピー的な意味があるから、必ず
しも中身がダメだとは言わない。しかし、“本気で”
語学をモノにしたいと考える学習者からすれば、
そのタイトルに誠意が感じられない。あくまで、本
書の理論に照らし合わせて合理的だと判断でき
るのであれば、購入すればよいと思う。

2. 音声のないもの

これはもういい加減説明不要だろう。文法書や翻訳のための専門書などは音声がないのが通常である。これはある程度やむ終えないかもしれないが、私はこれらにも音声はやはりつけるべきだと思っている。文法にしてもCゾーンの翻訳にしても理論を理解した後、脳に浸透させるのは結局耳からの大量インプットが効率的だと考えているからだ。

3. 高額なもの

世の中には人のコンプレックスにつけこんで高額の教材を買わせるいかがわしい商売をする人がいる。残念ながら、それにそそのかされてローンを組んで高額教材を購入してしまう人も後を絶たない。私はこれらの教材を真面目に評価したことはないが、おそらく悪くはない教材なのだと思う。但し、『高い＝効果がある』という単細胞的な考えをもつ方は根本的にものの価値を測る目を

養わなければいけない。“仮想留学”で説明するが、現在は、インターネット上で、その価値を正當に換算すれば何十万円をくだらないであろうものが無料で提供されている世の中である。私は教材を購入する際、本当に価値があると思ったものに対してはお金を惜しまない方であるが、“価格”を見てその“価値”を測るということは一切しない。これは教材でもレストランの料理でも服でも何でも同じである。日本のように“定価”の決まっている社会では、逆にモノの価値を見る目が鍛えられない傾向にある。中国のように値段交渉が当たり前の社会では逆にこれが鍛えられる。誰も騙されているという感覚はなく、販売者と購入者が合意した価格が当事者間でのモノの価値だからである。私は中国語を一から独学で習得したが、これにかかった総額は途中で通った会話スクールを含めても30万円以内に収まるはずだ。そして、習得レベルに達した今は、市販の教材ではなくイン

ターネット上の無料メディアが最高の教材になっている。あなたが高額な教材を選ぶ際は、一度本来の目的に立ち返って考えてみよう。“語学を習得”するという目的に対しての合理的な手段として、それが本当に支払う金に見合うものなのかを。

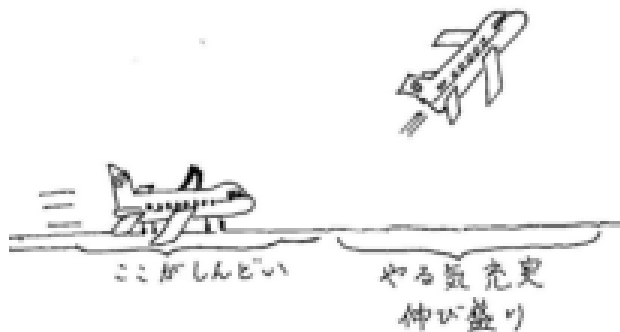
2-9 モチベーションの保ち方

語学の理論についてはご理解頂けたかと思う。既に知っていることもあれば、目にうろこなこともあったのではないだろうか。今まで間違った認識を持っていた読者には何度も読んで頂き、正しい認識をもって正しい学習法に取り組んで頂きたい。

さて、いくら正しいアプローチを理解したとしても、それだけでは語学は習得できない。繰り返すが、語学は継続しないと習得は絶対にできない

のである。習得したとしても使わなくては絶対に
廃れる。しかし、習得してからは、習得するまでの
努力よりもずっと楽である。Pain(苦しみ)は継続
とともにPleasure(快楽)に化けるのである。語学
の習得過程は飛行機の離陸ととても似ている。
大型の飛行機は滑走路を走り始めるときはもの
すごいエネルギーが必要だ。ジェットエンジンが
大きな音を立て、巨体が動き出す。動き出すとど
んどん加速し時速約300km位に達して初めて離
陸する。離陸してからも高度を上昇し続け、高度
1万メートル程度で初めて巡航段階に入る。巡航
に入れば後は目的地に向かって飛ぶだけであ
る。当然、巡航中でもエンジンを止めればすぐに
墜落はしないが段段高度が下がり、終には地に
落ちてしまう。飛行機がどの段階で一番エネル
ギーを使ったかは一目瞭然、最初の滑走時であ
る。語学も勉強を始めてから軌道にのるまでが一
番つらい。何故なら滑走路を走っているときはま

だ地上で成果がほとんど見えないからだ。しかし、語学の学習者はこの成果の見えにくい時期をいかに乗り切るかを工夫しなければいけない。成果が“見えにくい”と書いたのは実は確実に成果はあるからである。この少しの成果を見えるようにして、モチベーションを保つのはテクニックが必要なのだ。このテクニックを見ていくことにしよう。



2-9-1 目標設定と見える化

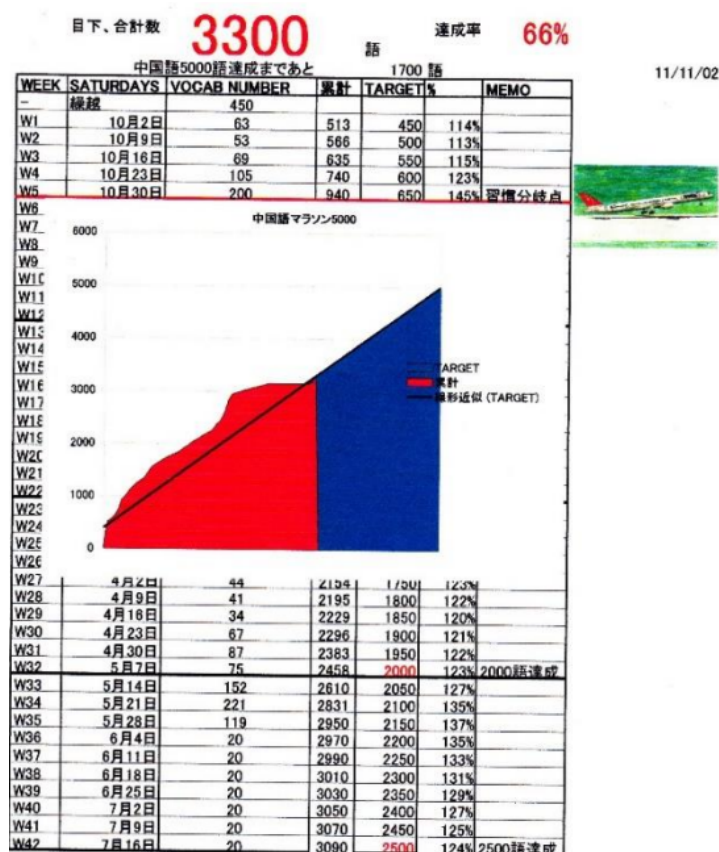
語学を習得するまでの道のりは短距離走ではなく長距離走である。1ヶ月や2ヶ月集中して取り組んだところで実用的なコミュニケーションツールとして外国語を習得することは難しい。あなたがマラソンを走ることを想像してほしい。あなたが40キロの道のりを完走するためには何が必要だろうか？いくらやる気満々で走り始めても具体的な指標がなければ途中で疲れて歩き始め、終にはあきらめてしまうのがオチである。しかし、多くの語学学習者はこのような哀れなランナーと同じことを繰り返している。

あなたが語学学習を始める際に最も最初に決めないといけないのはゴールの設定である。分

かりやすい例としてあなたの課題が単語量を増やすことだとしよう。この場合のあなたの目標は『今はまだ知らない1000語の新しい単語を自分で使えるようになるレベルまで習得する』こととすればいい(目標設定)。これさえ決まればあなたは40キロ先のゴールに向かって寄り道をせずにまっすぐに進むことができるようになる。

ゴールが決まったら次はペース配分である。マラソンランナーでも最初から全速力で走る人がいないように、語学の場合も無理のないペースでの毎日の学習する量を具体的に知っておかなければいけない。ペースを知るには、いつまでに最終ゴールに着くのかを決めればいい(期限の設定)。1000語の単語であれば大体1年あれば無理なく覚えることができるから、1ヶ月に100語覚えれば十分だ。1ヶ月に100語だと、10ヶ月で1000語、残りの2ヶ月を予備や復習期間とすればいい。あまりキチキチの無理な目標を立てると挫

折する可能性が高いのである程度の調整の余裕を持たせたほうがよいと思う。1ヶ月の学習稼動日を土日を除く20日とすると一日5単語覚えればよい計算になる。土日は同じように予備日として取っておく。これであなたは40キロのマラソンを目標タイムで走るための具体的なペースが決まったことになる。



これで終わってはいけない。実は私を含めて殆どの人間は怠惰だと思う(そうでないあなたには

ごめんなさい)。いくらゴールが決まって、その日にやることが決まったとしても、それだけでは私達の多くは続けることができない。人間は成果が具体的に見えないとモチベーションを保てないのである。そこで、学習者は必ずエクセルを使って計画を立て進捗をグラフ化してほしい。エクセルのグラフ化は今は自動でできるから非常に簡単である。目標の1000語を青い山で表して、それに重ねるように実際の記録を赤い山で表せば、あとどれだけ行けば頂上なのかが具体的に『見える化』される。この『見える化』がモチベーションを保つために果たす役割はあなたが思っている以上に大きい。あなたの課題が発音・イントネーションなど数値化しにくいものであったとしても過去の発音と現在の発音を録音して聞き比べれば成長の『見える化』は可能である。どんなことでも少し頭を使って考えれば必ず『見える化』できるので、必ずこの点はおさえておこう。小さな週目標や月

目標を達成するたびにステーキハウスに食べに行く、など自分にご褒美を与えるのも効果的なテクニックと言える。

さて、目標もペースも決まり、成果も『見える化』できた。実はもう一つだけ忘れてはいけない重要なことがある。それは習慣が軌道にのるまで絶対にサボらないことだ。滑走路を走る飛行機が一度でも止まってしまったら、また走らせるにはとてつもないエネルギーが必要になる。通常は計画を実行し始めてから最初の3週間が習慣化のカギとされる。これは自身の経験からも絶対にそうだと言える。この3週間の間、あなたは心の中に潜む悪魔ちゃんから必ずサボりの誘いを受けるであろう。誘惑に負けたが最後、あなたは振り出しに戻ってしまう可能性が高い。逆に最初の3週間さえ乗り切れば飛行機は離陸し飛び立つことが可能になる。だからこの期間は自分にどんな言い訳も許さずに着実に計画を遂行されたい。

語学学習のモチベーションを保つテクニックについて解説したが、ここでおさらいしておこう。あなたが学習を継続する上で必要なのは、次の3つだ。

1. 目標の設定(高すぎず、低すぎず)
2. 期限の設定(その日までにやってやる、と気合を入れる)
3. 成長記録を表にして打ち出す(見える化)

そして、始めて軌道にのるまでの**最初の3週間は絶対にサボらないこと**である。

目標は達成したらハードルを上げる

当たり前のことであるが同じことを繰り返すことは基礎を固めることにはなってもレベルの向上は望めない。例えば、あなたが腕立て伏せを毎日1

0回やるとする。3ヶ月毎日やっていれば、軽々と10回やる筋力がつくだろう。しかし、これを一年続けたところで100回する筋力がつくだろうか？当たり前であるが、つくわけがない。100回やるには10回が軽々できるようになった時点で12回に、それができたら15回へと徐々に訓練回数を増やしていかなければいけない。そうすることで少しずつ筋肉が肥大化して筋力がつくのである。語学も全く同じである。外国語を学び、ある程度しゃべれるようになった時点でそれ以上の努力をしない人は多くいる。例えば日常会話ができるようになれば、あなたが一定のレベルまで達したということであり、話していて楽しいはずである。しかし、例えば日常会話を週一回、一時間続けてやっても、今のレベルの維持にはなっても、更なるコミュニケーション能力の向上にはならない。日常会話ができるようになったら、次はビジネス会話、商談、討論、最終的にはプレゼンテーションと

いうように、常に次のステップへと負荷をかけていかなければあなたのレベルはそこで止まってしまうだろう。そして、次のステップに進むために必要なのは語彙量なのか、流暢さなのか、論理構成力なのか、などと具体的な課題にまで落とし込んで適度な負荷をかけてトレーニングを継続すべきである。私の中国語能力が同じ期間勉強した平均的な学習者と比べて随分高いと言われるのは、正しいやり方でこうしたトレーニングを重ねたからであって、何も私が天賦の才などというのはとんだ誤解なのである。

あなたが本当でやる気があって自分が奮い立つのであれば、挑戦的な目標を設定してもいい。アメリカのケネディ大統領は1960年代のソ連との冷戦の真っ只中、宇宙開発で完全に遅れをとっていた自国民に対して無謀とも言える目標を設定し、自ら退路を断った。“We choose to go to the moon in this decade. (私達はこの10年(6

0年代)が終わる前に月に到達することに決めた)”この演説が1962年にヒューストンで行われた当時、アメリカは有人宇宙飛行さえ実現していなかった。ケネディは全精力を傾けないと実現不可能なところに目標を設定し、明確に期限を決めたのである。演説の翌年、ケネディは暗殺されてしまいが、期限ぎりぎりの1969年アポロ11号は終に月面着陸に成功するのである。

私はケネディのような大きなスケールの目標も、グアム旅行までに3キロ痩せるというような小さなものも、基本的には同じ方法で達成できるものだと思っている。

2-9-2 怠け者のためのタイムマネジメント

タイムマネジメント・・・私はこれができる人がうらやましい。自分で時間の管理ができる人は大体仕事が『デキる人』だと私は思う。もし、あなたがそのデキる人なら私は釈迦に説法する気は毛頭ない。ここは飛ばして次に読み進んでくれて結構だ。私は私と同じようなタイムマネジメントが苦手な人のためにこの章を書きたい。既に社会に出て仕事をしながら語学を習得しようと思う場合、忙しい中、勉強時間を捻出しないといけない。これは正しい。『時間を捻出するにはタイムマネジメントのスキルが必要だ・・・』とあなたは思うかもしれない。これは半分は正しいが半分は間違いだ。

何故なら、自他共に認めるタイムマネジメント下手の私がきっちりと、しかも何年にも渡り時間を捻出し、結果を出しているからである。くどいようであるが、もう一度だけ我慢して私の自慢を聞いてほしい。私は当時、育ちざかりの子供が二人おり、妻は典型的なキャリアウーマンであった。毎日の仕事、子供の保育園送り、お風呂いれ、寝かしつけ・・・もうてんてこ舞いである。そんな環境の中で私は独学で4年足らずで中国語をマスターしたのである。『あなた、よっぽどデキるのね』と言われれば嬉しいが、実のところ、それ程デキるわけではない。元来“怠け者”の私が、この状況下でどのようにして時間という資源と折り合いをつけたかをご紹介します。

フランスの英雄、ナポレオン皇帝は緊急の仕事は最も忙しい部下にやらせたそうだ。忙しい人間こそ時間を上手に使い、早く仕事を終わらせるだ

ろうことをナポレオンは知っていたのである。忙しい人に共通しているのは、与えられた仕事をやる時間が限られているということだ。私はこのナポレオンの言い伝えに時間を有効に使うための最大のヒントを得ている。つまり、やらなければいけない仕事を開始する時間は、ほぼ強制的に決まっている方がずっと楽にそして確実に実行できるということだ。逆にいつでもできる面倒くさい仕事というのはいつでもできるからこそほぼ確実に後回しになるのだ。あなたがA型だろうがAB型だろうが、その習性はおそらく治らない。あきらめよう。そんなダメな性格を直さずに問題を解決するために私の出した答えは、『強制される時間を逆に利用する』という考えである。

月～金		休日・祝日			
BEFORE		AFTER			
4:00	睡眠	6:00	起床、シャドーイング		
4:30		起床	起床		
5:00		だらだら	だらだら		
5:30		朝食	朝食		
6:00		だらだら	雑務＋サッカー時のやること準備		
6:30	起床、ウォームアップ	8:00	子供のサッカー練習観戦		
6:30	子供起こして、朝食	8:30		サッカー観戦しながら読書・リスニング	
7:00	風呂洗い、ゴミだし、雑務	9:00			
7:30	通勤	9:30			
8:00		通勤しながらリスニング			10:00
8:30		通勤しながらリスニング	10:30		
9:00	仕事	11:00	昼食		
11:30		仕事		12:00	
12:00		仕事		12:30	
12:30	昼食	13:00	家族の時間		
13:00	仕事	18:00			
18:00		家族の時間		18:30	
18:30		帰宅	19:00		
19:00	夕食	19:00	夕食		
19:30	子供と風呂	19:30	家族団楽		
20:00		子供と風呂		20:00	
20:30		風呂上りの家族団らん		20:30	
21:00	子供寝かしつけ	21:00	勉強？お酒？ネット？		
21:30		子供と一緒に就寝（眠りにつくまでリスニング）		21:30	
22:00				勉強？お酒？ネット？	22:00
22:30				勉強？お酒？ネット？	22:30
23:00				就寝	23:00
	就寝		就寝		
勉強時間：1時間弱		勉強時間：平均1時間弱			
		勉強時間：平均3時間程度			
		リスニング時間：3時間弱			

怠け者のタイムマネジメント Before & After

上記は私が中国語の独学当初、語学やその他の勉強に割いた時間を平日と土日・祝日別にBeforeとAfterで示したものである。学習時間を色付きで表している。Beforeを見れば分かるとおり、私は子供の面倒や雑務のお陰でかなり時間が拘束されていた。試行錯誤の上、私はこの拘束される時間に逆らわずにその時間の強制力を利用して時間を作ることにしたのだ。例えば、『寝る子は育つ』というから子供は9時に寝かせるよ

うにしていた。寝かしつけは寝かせて眠るまでは完全に時間を拘束される。子供が寝静まるのを見計らって、そっと起きて書斎についたらもう10時近くになっている。そこから作業を開始してもすぐにエンジンはかからない。おまけにリビングのテレビを通る時にボクシング中継などやっていたら、もうアウトである。こんな誘惑に勝てるほど私は強くないのだ。どうすればよいかというと、子供を寝かしつけるのと同時に自分も9時に寝てしまえばよいのである。そして朝4時に起きるのだ。朝4時というと、そんなの無理と思われるかもしれないが、9時に寝ればきっちり7時間の睡眠をとることになるから睡眠不足ということはない。4時に起きてリビングに入ると同時にSteve Jobsのスピーチをシャドーイングして一日が始まるのである。もちろん、習慣づけるまでの間、多少の我慢やテクニックがいることは前章で説明したとおりであるが、慣れればこれが当たり前になる。

土日祝日も同じである。そもそも私は土日に早起きして勉強するほど意思が続きそうにない。ところが当時子供のサッカーは長男が8時から始まり、次男は9時からで両方11時ころまで練習していた。次男は保育園年長だったから、万一のために保護者が見ていなくてはいけなかった。私はこの2時間を周りのお父様方お母様方と談笑しながらぼーっと見るのが嫌だった。どうせ2時間は拘束されるのであるから、その時間はピクニック用の折りたたみ式椅子を携えて、英語の本か中国語の教材とWalkmanを必ず持っていく。コンビニでコーヒーでも買ってきて、椅子に腰掛けながらリスニングしたり、本を読んだりして過ごす時間は意外と書斎よりも集中できるのである。そして最後の15分程度だけ、子供達の練習試合を見て、一言二言必ずアドバイスをしてあげることで勉強と子供とのふれあいも両立できた。この週末の2時間はもともと強制される2時間であったが、

結果として私にとっては貴重な学習 & リラックス時間になっていた。

たまに週末に雨が降り子供の練習が中止となることがあった。面白いことに、そういう日は思いつきり家で勉強ができるはずだが、意外とだらだらと過ごしてしまうことが多いのだ。何故なら家にいればテレビやインターネットといった誘惑がたくさんあるからである。よく監獄に入った人が獄中記などを書いて出所後に出版したりすることがあるが、あれも強制された時間を有効活用するという意味においては、私の方法と根本的には同じだと思う。この後の“仮想留学という考え”で詳述するが、私が過去4年で語学のために使った時間の8割近くはこのように物理的に強制されて耳だけ開いている時間を有効活用しただけだと言える。ご覧の通り、そこにタイムマネジメントのテクニックと呼べるほどのことはないし、そもそもそれ程頭も使っていないと思う。単純に平日は家と仕

事の間で生まれる隙間時間、土日は子供のサッカー練習を見る時間の全てをリスニングとシャドーイングにあてただけである。

例えばあなたが弁護士になりたくて勉強しているのであれば、必ずしもこの方法がそのまま適用できるとは言えない。恐らく机上の勉強が一定以上必要だと思うからだ。でも語学であれば、このような強制力は逆に有利に働くと考えて間違いない。何故なら、語学は耳から始まるものであり、一般に日本の語学学習者はこの耳学の絶対量が足りないからである。だから、あなたが忙しいのであれば、逆にラッキーと思ったほうがいい。間違いなく24時間をまるごとマネージするよりはずっと簡単はずだから。

語学のモチベーションを維持するためのいくつかのテクニックをご紹介してきたが、ご理解いただけただろうか。え？読んだけど内容もりたくさん

で覚えられない？そんな私と同じ“凡人”なあなたのために、一発で極意を覚えるための方法を伝授しよう。

モチベーション管理は『キミもタイムマネジメント』だ。

キ	期限設定
ミ	見える化
モ	目標設定
タ	タイムマネジメント(時間管理、時間捻出)

これを今すぐ口にだして10回言って覚えてほしい。これがそろえば、続けることは可能になるはずだ。続けられないあなたが語学を“モノ”にすることは絶対にありえない。続かない理由は必ず上記のいずれかにあるはずだ。アホな私にもできたのだ。あなたにできないはずがない。

テンションを下げるようで申し訳ないがひとつだけ訂正しておこう。この章の冒頭で飛行機は滑走路で最もエネルギーを使うと言ったが、必ずしも正しくない。実はその前の搭乗手続きが最も面倒くさいのである。もうお気づきであろう。あなたがこの本を読んでいるということは、出国手続きの列で並んでいるのと同じである。今すぐ搭乗手続き(計画策定)を済ませて離陸されたい。

補足：語学検定について

語学を学習する上で目標の設定は大事である。私は英検、TOEIC、中国語検定などの語学テストは学習を継続する上での目標設定として有効だと思う。しかし、ご存知であると思うが、これらのテストは語学能力を計る上で完璧な指標にはなりえない。なぜならこれらのテストはインプット能力(リスニングとリーディング)を計り、相関性

のあるアウトプット(スピーキングとライティング)を推定するものであるからだ。理論的には相関性はあると思うが、実際はアウトプット能力は練習量がモノを言うことは説明したとおりである。私は22歳の時、語学検定の最上級を受けて合格し、2次試験で面接を受けた。このとき、面接官はアメリカ人と日本人の二人であったが、日本人の方の面接官の英語は正しいが聞き苦しくスムーズでなかったのを覚えている。この方はある程度年齢がいていたので、おそらく昔の勉強方法で一生懸命勉強したのだと思う。初期段階でアウトプットを大量にやっていれば日本でずっと勉強したのだとしてもスムーズにしゃべれるようになっていたはずだと思う。

TOEICを例にとると、点数は700点に満たなくても意思の疎通にほとんど不自由しないくらい流暢にしゃべる人もいれば、900点あるのに何ともたどたどしい英語をしゃべる人も多くいる。どちら

がよいか？私の答えは両方できるのが好ましいが、強いていうのであれば、やはり前者のほうがよい。何故なら人間の意思疎通はVerbal Communication(口頭会話)に始まり、次の段階としてWritten communication (読み書きによるコミュニケーション)があるからだ。しゃべれるけど点数が低い人は概して語彙力が乏しく文法的にも間違ったまま覚えている場合が多い。意識して語彙を増やし、間違いを指摘してもらえばよい。点数が高いけどしゃべれない人はアウトプットの練習が足りない、もしくは全くやっていない。学者タイプや勉強好き、人付き合いの得意でない方に多く見られる。前述した通り、相手がいなくてもアウトプットの練習はできる。今からでも遅くないので、基本の発音から見直し、大量のシャドーイングで追いついてほしい。

ご感想を[こちら](#)へお願いします！



ガリッガリして感想ちょ!

2-10 仮想留学という考え

自身の中国語独習を振り返ると、私は4年間の間、中国に“仮想留学”していたのだと思う。何故なら仕事以外の隙間時間の大部分を耳からの学習にあて、目を閉じればそれはほとんど中国にいるのと同じ環境だったからである。現在はYoutubeやTiktokなどを初めとしたアプリやデバイスが進化を遂げ、一昔前では想像もつかなかったような環境を手にすることが可能になっている。私は“語学”(ここでは英語か中国語)の習得のみを目的にするのであれば、アメリカや中国に行くよりも、むしろ日本にいたほう効率的な学習が可能だと本気で思っている。これは大げさではなく本当の話である。私が大学でのアメリカ留

学の後半期、帰国してからの就職活動、等のため、語学の資格(英検やTOEIC)を取ろうと考えていた。私は様々な経験から英語学習において、アメリカでしかできないこと、日本でしかできないことをほぼ明確に理解していた。語学の資格を取ったり、テストの点数を上げるための勉強は日本で良質の教材を使用するのが最もよいのだが、アメリカでは逆に手に入らないのだ。私は別の用事でロサンゼルスに行った時に当時リトルトーキョ(ロサンゼルスのダウンタウンにある小さな日本人街)にあった百貨店やオハン内の書店の“語学コーナー”でほぼ一日を過ごし、英検1級のためのテープ付きの単語集を購入したのを覚えている。アメリカの大学でどれだけ大量の書籍を読んだとしても英検1級レベルの単語やイディオムを効果的に学習することは難しい。私が帰国後、猛勉強を開始して英検1級を取得したのは、

間違いなくヤオハンで購入したテープによるところが大きい。

現在はあの当時と比べてインターネットが進化を遂げている。帰国後のあの当時、日本でアメリカの番組を見たければ、有料衛星放送のスカパーなどに登録して視聴するしかなかったが、現在ではインターネット上のYoutubeで過去何十年までさかのぼり世界中のビデオクリップが見たいときに視聴できるようになっている。

2023年現在、インターネットはさらなる進化を遂げ、英語でも中国語でもネイティブ音声材料はどれだけでも手に入れることが可能になった。おまけに国際都市である東京に住んでいれば様々な外国人と交流をもつ機会がいくらでもある。つまり、あなたのやる気次第で、目で見えるもの、耳できくもの、口にするもの全て学習言語向けにアレンジすることが可能なのである。私はこれを『仮想留学』ということにしている。あなたが高いお金

を使って留学して海外で得られる環境は、現在ではネット環境さえそろっていれば、それと同等かそれ以上の環境をつくることができるのである。では私が“仮想留学”を実現するための“三種の神器”をはじめ、どのような機器や機会を利用して世界とのつながりを維持しているかについて紹介したい。

2-11 仮想留学を実現するためのツール

三種の神器① MP3 player (スマホは不可)

仮想留学を実現させるための3種の神器のうち、私が真っ先に挙げるのがMP3 playerである。日本の学習者はネイティブ音声のインプットが圧倒的に足りないということを繰り返し述べたが、そのインプットを増やすには手軽でかつ大量にネイティブ音声にアクセスできる状態を作らなければいけない。正直に言えば、最も便利なのはスマホであるのだが、スマホはその便利さ故に他のエンタメ誘惑が強すぎるのでお勧めしない。人は目の前の誘惑には自分が思っている以上に弱い。だからスマホとは別に語学専用のMP3 playerをもち、いつでも学習中のネイティブ音声聞けるようにしておくことが大事である。これらのポータブルデバイスなしに、すきま時間を捻出

して短い期間で語学をマスターすることは絶対に不可能だろう。

歴史を紐解くと、1979年にSonyが初代ウォークマンを世に送り出し、人類は初めて歩きながら録音された音声を聞けるようになった。しかし、弱点はテープの長さが限られることと、電池が切れることだった。人は通常テープを裏返すとか、電池を交換するといった些細なことでさえ面倒くさく習慣にできないものだ。オーディオ機器は進化を続け、2001年アップル社がi-PODを発表して常識を覆した。かのSteve Jobs氏が言うように、ポケットにCD何百枚分もの情報を入れて持ち歩けるようになった。そして現在はスマホの進化により、これがいつでもどこにいてもほぼ無限に音声材料を聞くことができるようになったのである。これは同時に散歩している時間、通勤時間、就寝時間、トイレの中、皿を洗うとき、洗濯物を干す時間、全ての隙間時間を仮想留学時間に変えることができる

るようになったという革命的なことである。あなたはこの事実をどれだけ深く認識しているだろうか。私は学習を開始してからの約4年間の間、ほぼ常にWalkman(現在ではスマホ)を持ち歩いていた。中身はオーディオブックや好きなスピーチや講演(英語、中国語)の他、気晴らしのためのジャズやクラシック音楽も入れていた。これらのお陰で私は全ての隙間時間を有意義なリスニング時間に変えることができた。いずれにせよ、中学生以上で本気で語学に取り組むのであれば、これらのどちらかは必需品である。語学の根幹の根幹は(良質音声の)リスニングなのである。いくら机の上で頑張って勉強しても、このリスニング量が臨界点に達しないと脳には当言語の回路が構築されないのだ。机の上の勉強というものは、むしろ補助的な学習であり、リスニングにこそ重きを置くべきである。

三種の神器② PCとインターネット

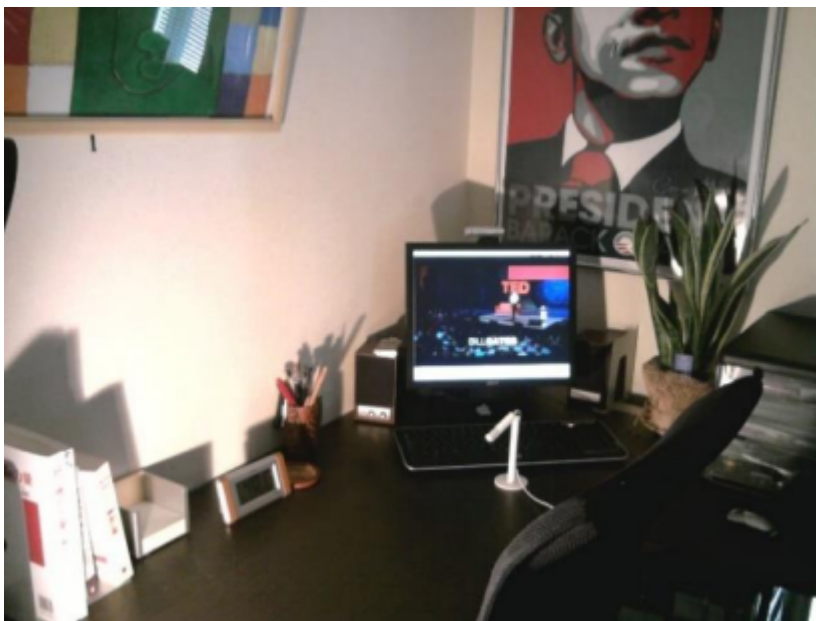
これが必要なことに異を唱える人は恐らくいないであろう。私は全ての計画やモチベーション管理はエクセルひとつで用が足りると思う。逆になれば、手で作ることでもあるが、恐らく面倒くさくてやらないはずだ。インターネットがもたらしてくれる情報の泉については、ほとんど言う必要がないほど知れ渡っている。インターネットには国境がない。もし、あなたがインターネットを日本語でしか使用してないとする、それは狭いプールで泳いでいるのと同じである。インターネット上の情報は英語と中国語をあわせると日本語情報の10倍以上になるだろう。正に情報の海でありキャパシティが違うのである。当然、この海の中で価値のあるものを探す能力も必要であるし、質の高いサイトは登録しておくのが一番よい。インターネットがこれまでのテレビやラジオといったメディアと決定的に違うのは視聴者が能動的に自ら自分に

あった内容を検索して、好きな時間に視聴できる
というところである。テレビやラジオは100%受動
である上、放送時間が決まっているため、今では
極めて効率の悪いメディアだと思うようになった。
私がお気に入りに登録しているサイトや利用して
いるフリーウェアについては後のページで紹介す
ることにしよう。もちろん、まねする必要はなく自
分にあったサイトを見つけて利用すればよいので
ある。

三種の神器③ 書斎

3種の神器のうち、最後が書斎である。私は当
時、東京郊外の多摩川のほとりに小さな3階建て
の家を購入し、そこをアジトに活動していた。通
常、私のような庶民の住む東京の3階建て建売
物件は大体は1階が風呂場とおまけの物置部
屋、2階がリビング＋ダイニング、3階が寝室と子
供部屋という構成である。タイムマネジメントで説

明したように、私は4時起き生活をしていたため、朝の時間を有効に使うために自身の書斎を確保していた。私が家庭内闘争の末、1階の“もの置き部屋”を占拠することに成功したのだ。当然、他の陣地は全て敵(妻)の手中に落ちた。



語学など、長期計画を立てて継続学習する場合、ベースとなる自分のステーションを持っていたほうがよい。当時、私の書斎にはデスク、椅子はもちろん、PC、オーディオセット、書棚など自分が知的活動をするために必要なものがすぐに手に入るようになっていた。先述した通り、PCはス

カイクやマイクなどの録音機器が設置されているから、海外の友人とも簡単に繋がることができ、書斎は一つのインターナショナルステーションになっている。また、両側の壁には私の好きなオバマ元大統領のアートポスター、尊敬する語学の天才シュリーマンの肖像画(アートクラフト)が掲げられている。やる気が出ずにサボりがちなときに彼らを見ると“Never stop trying, I’m watching you (私が見ている、サボるでない)”と声をかけられている気がするのである。このように書斎を一つの聖域にして、そこに入れば勉強モードに入れるようにすることもテクニックの一つだと思う。もちろん、たまには気分転換におしゃれな喫茶店などに行ってリラックスしながらやるのもよい。

自分のスペースを確保できないかわいそうなあなたには、今からでも家の主と交渉を開始することをお薦めする。多少の家庭内テロに訴えてで

も、せめて3畳程度の自身のスペースを実効支配すべきだ。そして、そのスペースを維持するためには、あなたがそこから何か価値のあるものを生み出さなくてはならない。例えば、あなたが書斎のお陰で本当に語学を“モノ”にできたのであれば相手も認めてくれるに違いあるまい。

その他のツール

AIスピーカー (Google Speaker)

AI スピーカー (Google Speaker)



Google Speakerを英語(中国語)に設定すればあなたがしゃべる英語が本当に通じるかを最も簡単に確認できる。ネット環境さえあればかかるお金はゼロ円である。AIの進化のおかげで必ずしも対人でなくともこれらのデバイスが勝手にあなたの英語力(中国語力)を判定してくれる。繰り返すようであるが、言語は音声のインプットとアウトプットが基本である。あなたのしゃべる言語のアップットが正しくなければデバイスにはインプッ

トしてくれない。例えば、次の英語をGoogle Speakerの英語版で試してほしい。

- * "Hey Google. How is the weather today?"
- * "Hey Google. Who is the current prime minister of Japan?"
- * "Hey Google. How many years do you think it will take for me to master English?"
- * "Hey Google, do you know why former prime minister Shinzo Abe got assassinated?"

もし、"Sorry, I don't understand"と言われたら、あなたの発音、イントネーション、あるいは文章構成(文法)のいずれかが間違っているということになる。机の上の勉強ではなく口で発音する練習を繰り返して克服していこう。

付加価値の高いインターネット上のサイト

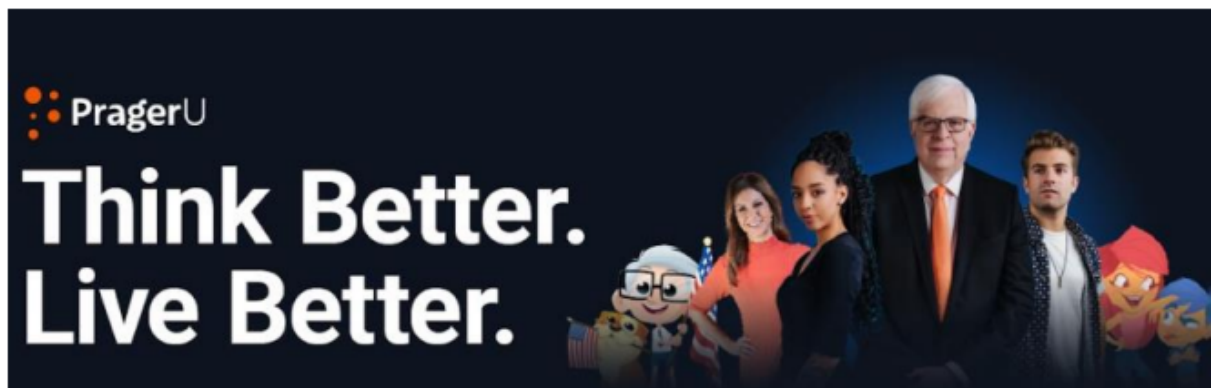
TED (<http://www.ted.com>) - Youtube

TEDは世界中の知識人をスピーカーとして招き、夫々のテーマで15分程度のプレゼンテーションを行わせ、それを世界中に無料で配信している。スピーカーにはクリントン元米国大統領やマイクロソフト元CEOのビルゲイツなども含まれ、ヘッドフォンをして大画面で見れば、もはや日本にいることを忘れてしまう。“Ideas worth spreading”というキャッチフレーズで知的向上心の高い方なら日本人でもロシア人でもアルゼンチン人でも関係なく視聴可能だ。言語は英語に統一されており、何よりプレゼンを15分という時間設定にしてあるところがすばらしい。英語学習が実用レベルまできて、“英語で”新しいアイディアを得る段階に入っている人にとっては最適なサイトと言える。



Prager University - Youtube

<https://www.youtube.com/@PragerU>



アメリカの保守派の論客であるPrager氏が主催して教授陣を集め、世界のさまざまな社会問題について5分程度のプレゼンに主観をまとめてい

る。好き嫌いはあるとは思うが、アメリカという国にはいろいろな考えの人が存在し、必ずしもリベラルばかりが正しいのではない、ということがよく分かる。上級者向けの内容であるが、こんな機知に富む教材が無料で見られる時代になったことが今でも信じられない。一度、ご覧あれ。

i-TUNES & PODCAST

アップル社が提供するフリーフェア。i-PHONEのステーションとしてだけでなく、様々な番組のPODCASTを登録することにより、いつでも海外の好きな番組を視聴することができる。これを使用していると、ケーブルテレビで有料で見ていた時代からいかにメディアが進化しているかを思い知らされる。音声教材もまとめてi-TUNESを利用して入れておけば、音声速度のコントロールもできて非常に効率的である。

Audible(専用フリーウェアをダウンロード後、有料登録) - 上級者向け



忙しいアメリカのビジネスマンの間では読む本ではなくて聞く本“AUDIO BOOK”が普及している。Audibleはオーディオブックを売るサイトとして最も普及している。登録すれば毎月何万とある書籍の中から1冊を購入してi-PODにダウンロードして出勤電車の中などで聞くことができる。内容は

マーケティングやタイムマネジメントなどのビジネス関連を始め、小説やジョーク集など様々なジャンルから選べるので飽きることがない。言語はリスニングから始まり、続けないと意味がないと書いたが、このレベルになると興味が尽きないから、止めたくても止められなくなるはずだ。

2-12 語学の実践場所

ここまで語学の理論と具体的な習得方法について詳しく述べてきた。“仮想留学”の締めくくりとして、あなたがこれまで日本にいながらにして勉強した外国語を実践できる場所を紹介したい。実践できる場所は何も語学学校や会話スクールだけではない。あなたの創造力と実行力如何でい

かようにもなりうるというのが私の偽らざる実感である。

英会話スクール

前述したように、語学、特に日本人にとっての英語と中国語は最初の段階で正しい発音を覚えることが肝心だ。その意味で、英会話スクールなどでこの大事な時期にネイティブスピーカーに正しい発音を習うことは大切である。但し、正しい発音を身に着けた後、それが無意識にできるようになるまでの練習は貴重なレッスン時間を使わずに自分で練習することを心がけたい。よく、『英会話学校等に通って何年たっても上達しない』という人の話を聞く。私はそういう人の話を聞くたびに申し訳ないが当たり前だと思う。そういう人に限って、その時間以外は何もしていないからだ。考えてほしい。毎週1時間マンツーマンのレッスンを受けるとすると、年間でせいぜい50時間ちょっとで

ある。私は仮想留学で平日土日も含めて1日平均2-3時間を中国語のリスニング、一部をシャドーイングにあてていた。3週間でこの人の1年間の練習量を超えるのである。しかも、おそらくこの方は高額のレストラン料を支払っているのに対して、私は購入する教材が数千円かかる以外はせいぜいWalkmanの充電代のみである。教材も一定レベルを超えるとインターネットから無料でダウンロードできるから実質タダなのだ。要はこの方は会話学校に行けば自動的に上達するものだと勘違いしているだけなのだ。賢いあなたは分かると思うが、語学はそんなに甘くない。

因みに私も中国語学習で1年ちょっとだけ新橋の中国語会話スクールに通ったことがある。但し、この手の方とはスタートから気合が違う。私は先ず独学で半年間勉強し、基本の発音、文法、単語を覚え中国語検定3級を取得してから初めて会話学校へ行き始めた。当然、新橋に行くまで

の電車はずっと“仮想留学”しているわけだ。マン
ツーマンでのレッスンが開始すると私は必ず
Walkmanに専用マイクを取り付けてレッスン内容
を録音した。自分に何ができて何ができていない
かを確認するためである。そして、家まで帰りの
電車で当日のレッスンを聞きなおすのである。す
ると、レッスン中に聞き取れてなかったことが電
車の中で冷静に聞くと意味が分かったりするの
である。又、私は通常、先生が準備してくれるテキ
ストは使わなかった。代わりに自分で発音や意味
の分からない単語の例文をエクセルに書き出し
(当然この時点でPC上のピンイン打ちはマスター
している)、一から先生に読んでもらい、それを直
接録音した。後で聞き返すと、外で救急車のサイ
レンや選挙カーなどの雑音が入っていたりするの
であるが、不思議とそういうイレギュラーな雑音
が入ると情景などが思い浮かんで逆に印象付け
られ、覚えやすかったりするのだ。私は当会話ス

クールでは『勉強熱心でわがままな生徒』とされていたに違いない。

私は規定のチケットがなくなったため1年とすこしで学校は辞めたが、確実に元をとっている自信がある。もし、あなたが会話スクールに行くのであれば、せめて能動的にレッスン内容を録音することくらいはしてほしい。もし語学を教えることに少しでも情熱をもっている先生であれば、間違いなくあなたをリスペクトするはずである。

シュリーマンのエピソードをご紹介して締めよう。シュリーマンの生きた1800年代には今のような会話学校はなかったはずだ。彼は自分のスピーキング能力を向上させるために、その言葉も知らないユダヤ人をなけなしの金で雇って、自身が学習中の外国語をしゃべるのを延々と聞かせたという。わけのわからぬ言語を聞かされる方もたまったものではないが、この情熱あってこそ

シュリーマンは超人的な語学力を身につけられたのだと思う。

オンライン会話

中国語の会話学校を1年ちょっとで辞めた私は、それでもやはり実際の会話を訓練する必要性を感じていた。そもそも会話学校を辞めた理由は金銭的なことと時間的な拘束だった。

会話学校自体が高いというより、交通費や会社帰りで時間までカフェでくつろいだりするから余計な費用がかさむのだ。有難いことに当時インターネット会話学校なるものが流行り始めていた。今でこそZOOMなどを使ったオンライン会話は普通になったが、当時はまだ珍しかった。先生は中国に在住の中国人女性である。はっきり言って、最初から男の下心をくすぐるような会社の意図が見

え見えであるが、私はそれでもこのシステムを使い倒した。当時の費用は日本の会話学校の半分以上、家でやるから交通費も不要である。相手は普通の中国人女性（若いおねえちゃんが多い）であるから、ほとんど手加減なしで中国語を話してくる。キャバクラではないが、先生は選べるので、私はどうしても“かわいこちゃん”を選んでしまう。これはもう性（サガ）だろう。私は始めたころは着いていくのがやっとであったが、1年以上経過したころには、ほとんど普通に世間話をしていた。

今では方式でのオンラインスクールが英語でも中国語でも存在する。自身は受講経験はないが、先生が中国在住からフィリピン在住に変わるだけで、時差も1時間だから便利なはずだ。英語の場合も中国語の場合も会社側は生徒を継続させて儲けないといけないし、あなたは語学を向上させないといけない。会社側の意図がどうであ

れ、あなたの目的がブレさえしなければ、どんなところでも大体は使い倒せるはずだ。

勉強会

英語の学習や実践の場としては英会話スクール以外に『勉強会』も各地で開催されている。これは同じ志を持つ社会人が中心となって開催するもので、事前に題材を決めた上で、英語で会話したり議論したりする場である。中でも東京で最大級の語学勉強会のVITALというグループがある。ここではアメリカ政治やオバマ大統領の演説などを題材にして英会話を中心に勉強するVITAL ENGLISHと、英語がすでにできることを前提として様々な業界の著名人をスピーカーとして招くVITAL JAPANの2つに分けて、夫々行われている。毎回100人以上、多いときは200人近くが参加して盛り上がっている。このような場所は語学そのものを向上するためにも有効であるが、

同じ志をもつ者同士が知り合うことにより、お互い刺激しあうという意味でも非常に有意義であると思う。VITAL JAPAN (主催者:小田康之)

<http://vitaljapan.com/>

英語の実践なら新宿ゴールデン街

あなたが東京在住で本気でやる気があり、『行動力』があるのであれば、ここに行けば英会話は大体無料で実戦練習できる。新宿歌舞伎町の隣にあるゴールデン街と呼ばれる一帯は昔は文化人がこぞって訪れる文壇バーがひしめく飲み屋街であったが、最近はディープな外国人観光客がひしめく賑やかな国際憩いの場と化している。お客さんは欧州、アメリカを初めアジアからも多く訪れており、皆日本に興味津々な人たちばかりだ。英語の実践場としてはこれ以上最適な場所はない。アルコールが進めばあなたの英語力も1.5倍増し

となり、夜が明けるころには隣の外国人と意気投合しているはずだ。



中国語の実践は秋葉原か池袋

秋葉原が中国人観光客の爆買いスポットとなつて久しい。電気/PC製品のメッカである当地の大手の店には大抵中国人観光客対応のため日本語が堪能な中国人がスタッフとして働いている。

私はある程度中国語に自信がついたころ、秋葉原に行ってこれらの人に話しかけ、買う気もない商品を指して「多少钱？便宜一点行不行（いくらだい？安くなんないの？）』などと言って会話を試していた。又、池袋の北口付近も中国化しているスポットがあるので仮想留学にはもってこいだ。ゴールデン街にしろ、秋葉原にしろ東京にある無料“留学体験”スポットくらいに考えていいと思う。必要なのは少しの冒険心と行動力だけである。一度、お試しあれ。



終わりに

如何だっただろうか。あなたが語学を学ぶきっかけから具体的な順序と方法までを詳しく説明したが、目からうろこの部分も少なくなかったのではなかろうか。これらは難しい第二言語習得理論などではなく、私自身が英語、中国語を第二、第三言語として習得した経験から導き出した、全ての語学に共通する普遍的な学習順序と方法である。我々の多くは中学の教育で3年間、高校も入れば6年間、間違った概念で語学を学んでいる。その影響のため、大人になっていざ本当に英語が必要になったとき、全く使い物にならないという悲劇がいまだに繰り返されている。この本を読めばわかる通り、あなたが学ぶのが英語であれ、中国語であれ、語学を習得する順序と方法の基本は同じである。何語を学ぶのでも、最初の段階でネイティブの音声を基礎から応用へと段階的に、そして大量かつ継続的に耳に注ぎ込まな

ければ、あなたの脳に本当の意味でその言語の思考回路は形成されない。正しい音声のインプットがなければ正しい音声のアウトプットもできない。正しい音声のアプトプット（発音・イントネーション）は勉強して身に着けるものではなく、スポーツのように「練習」し続けて初めて身につくものである。発音・イントネーションをマスターしたらシャドーイングという手法を使い、ひたすら自身のレベルにあった教材で繰り返し訓練をしていき、段階的にレベルを上げていくのだ。木の幹に葉っぱを少しずつ付けていくように音声で聞き取れる単語量を段々と増やしていこう。文法は必要であるが、理屈で覚えるのは7-8割に留めて、あとは「習うより慣れろ」の精神でひたすら繰り返していこう。つまらない練習の繰り返しは習慣化して自身の成長を「見える化」するように工夫しよう。上記を芯から理解して、3年継続すれば誰で

も必ず一定レベルの語学力を付けることは可能だと私は信じている。

つまらない学習は段々と自身のレベルが上がるにつれて教材のレベルもあがり楽しくなってくるはずだ。Youtubeなどを使えば自分の好きなフィールドの映画やインタビューなどを見て、段々理解できている自分にうれしくなってきたらしめたもの。あとは日本国内にいても「仮想留学」できるスポットに冒険して実践しよう。これらのプロセスは全て私が32歳から中国語を独学してマスターするまでに行ったことであり、仮に明日から韓国語習得に取り組み始めたとしても、同じように日本にいながら2－3年でマスターできるだろうと思う。違いと言えば最後の実践場が秋葉原から新大久保に変わるくらいである。

私は語学が得意ではあるが、決して「天才」などではない。むしろ「凡才」だと本当に思う。10か国語以上の言語をマスターするような語学の天才

は確かに存在するが、彼らに習得方法を教わるのは得策ではない。昔、野球の天才「長嶋茂雄」がバッティングを教える際に「来る球をよーく見て、来た瞬間にバァーンと打つんだよ」とアドバイスしたそう。それで打てるようになるのであれば、誰も苦労はしないであろう。私は人並みに語学に時間をかけて苦労もしたが、無駄な遠回りのない普遍的かつ原則に基づいた語学マスターへの道をできるだけ具体的に分かりやすく理論立てて説明ができた、と自負している。

読者の皆様には是非とも同書の内容を何度も繰り返し読んで実践に努めてほしいと思う。本書で詳述したのはあくまで語学の習得法であるが、私が本当の意味で皆様に期待するのは語学を手段として真の意味での国際人への一步を踏み出して頂くことである。語学とは目的ではなくあくまで手段であることを忘れないでほしい。皆さまが語学をマスターした暁にはぜひとも、その新しい

OSを生かして新たなアプリのインストールを続けてほしい。最後までお付き合い頂き、有難う。

ご感想を[こちら](#)へお願いします！



グイッグイッして感想ちょ！

あとがき

同書は約10年前の2011年に書いた原書「本気で語学をモノにしたいあなたへ」を現代版にUPDATEしたものである。初版当初は語学の学び方を第一章、二章にまとめ、後半は「留学のすすめ」、「国際人になるために」という題目で、語学をマスターしたあなたがどのようにして真の国際人になるべきかを説いた内容であった。

2007年当時、市販の中国語教材はまだ少ない中で、会社から命令されたわけでもなく、語学をやり始めるには決して若くもなかった32歳の私は、過去の英語習得からの教訓と仮説をもとにほぼ4年間毎日中国語学習を続けた。その間、平日は9時に寝て朝4時に起きて学習をする日が続いたが、当の本人は努力しているという感覚はあまりなかった。おそらく、はたから見ても努力をしている人のほとんどは、それが習慣化されており、回りが思うほど苦痛を感じながら歯を食いしばってやっている感覚はないのだろう。しかし、離陸した飛行機が当たり前に時速800km程度の高速で飛び続けるように、その習慣は確実に実力という結果をもたらしてくれた。こんな私でもできたのだ。あなたにもきっとできるはずだ。今、英語と中国語を覚えた私はアメリカや中国の友人と頻繁に連絡を取りながら、この先、歴史がどう動い

ていくのかと、期待と不安の両方を胸に抱えながら我が国の行く末を眺めている。

最後に私が決して優秀ではないことを暴露するためにオチを付け加えておきたい。中国語を習得して会社でいきなり中国顧客と電話で談笑をして周りの社員を驚かせた私ではあったが、会社という組織で求められる協調性とはどうにも折り合いがつかなかった。また、2011年に人生を集約して書き上げた本は、大手出版社とも合意を取り付けたのだが、肝心な家庭内の稟議承認を得ることができず、結果、同書は現在まで10年以上の間、お蔵入りとなったのである。この10数年の間に世の中は私が当時想像していたよりも速く“私が恐れていた世界”へと変わっていった。当時「失われた20年」と言われた日本は「失われた30年」となり、「アジアの中で唯一成長してない国」という有り難くないレッテルを張られるまでに落ちぶれてしまった。

そこで、私はもう一度、同書を世に送り出し、日本の再興を担う若者たちへ精一杯のエールを送りたいと強く思うに至った。同時に私は20数年のサラリーマン生活にピリオドを打ち、自らが代表となるEMW語学研究所を設立し、残りの人生を「正しい語学」から開けていく素晴らしい世界をできるだけ多くの若者に届けることに捧げようと誓ったのである。

「ごがくゆうしん」はただのトライリンガルのおじさんではない。彼は語学というものを通して海外への文化の扉を開き、変容していく日本を憂いながら次世代の若者に「国際人」としての経験と技術を伝承する「語学の伝道師」なのである。原書の後半部にまとめた国際人論については、新たに「あなたが国際人になるために」にまとめてAmazon Kindleに上梓するので、是非そちらもご拝読頂きたい。最後まで読んでいただいたあなたに感謝するとともに、あなたが語学をマスターす

る100人中10人の一人になることを願ってやまない。Good Luck。加油吧。



完読ありがとう!

さあ、今日からアクションを!